

# 専門用語研究

Journal of the Japan Terminology Association

No.14 1997-08

---

**特集：ローマ字問題を考える**

日本におけるローマ字の現状 .....	柴田 武	1
ローマ字の正書法 .....	ヤマサキ セイコー	6
ローマ字による学術用語の書き表し方 .....	青戸 邦夫	10
ローマ字問題を考える .....	井口 昌平	17
ローマ字問題について .....	竹森 利清	24
「特集：ローマ字問題を考える」への後書き .....	太田 泰弘	26
編集後記 .....		27
投稿規定 .....		30

## 特集 ローマ字問題を考える

日本における「ローマ字のつづり方」については、昭和29年内閣告示にて、訓令式を基準としながら、「国際的關係や慣例によって改めがたい場合にはヘボン式によってもよい」旨が記され、許容の幅の広いものとなっています。そのため、その不統一による問題が多く生じています。

学術用語集でも、GHQ の方針に従い、各学会が慣用する方式を採用して、一つの方式に統一しないという暫定的な取扱いの下に、ローマ字表記が採択されました。「新制用語集」では、化学はヘボン式、機械は訓令式のローマ字書きで用語の読み方を示しました。

その後、国語審議会は、「ローマ字つづり方の単一化について（建議）」を決定し、これに準拠してローマ字化書きの統一を図りました。そして、昭和29年の内閣告示第1号として訓令式によることが決定されています。

「学術用語集に記載する用語の読み方を示すローマ字書きは訓令式とする」という規定にもかかわらず、最近の動きとして、「IEC 電気用語集」では、ヘボン式を基本としたルールを採用しています（平成6年）。

また、国際規格としてのローマ字を、訓令式からヘボン式に置き換えたらとの提案があることも漏れ聞いております。

このような状況のもと、改めて、日本におけるローマ字問題の経緯・動きを概観し、問題提起あるいは素材提供するのも意義があるのではないかと考え、本特集を企画しました。本特集にとどまらず、今後も機会あるごとにローマ字問題をとりあげたく、会員各位からのご意見・ご批判をお寄せいただければ幸いです。

編集委員会

～特集：ローマ字問題を考える～

## 日本におけるローマ字の現状

柴田 武\* SIBATA Takesi

### 1. 日本語をローマ字で書くこと

日本語の正書法(標準表記)は漢字仮名交り文である。しかし、現状から見ると、「漢字仮名ローマ字交り文」ではないかと発言する向きさえある。なるほど、TEL, NHK, vsなどが漢字仮名交り文のなかに出てくる。しかし、その発言はやや勇み足気味である。現状を分析すると、普通の書き言葉として出てくるローマ字は、かなりの場合英語であり、そうでなければその略語などである。TELはその1例である。ところで、興味深いのは、これがどう読まれているかである。TELを「テレフォン」と読む人はまずいないだろう。「デンワ」か「テル」かだろう。「テル」ならば、確かに漢字仮名ローマ字文の一部としても差し支えないような気もする。

英語でなければ、企業などの会社名がローマ字である。会社名の正式な登録にはローマ字表記は許されないらしいが、広告宣伝における会社名はTOYOTAであり、TORAYであり、SONYである。TOYOTAは日本語起源であり、TORAYは明らかに英語RAY(光)を意識した表記である。もとは「東レ」だから、TOREかTOOREかTOHREにすべきところであるが、これでは正直なところ、あまり好ましい字面ではない。SONYに至っては、英語もじりのヒット商品の名が会社名になった例である。

日本人向けの広告なのに、なぜ「豊田」とか「トヨタ」でなく、あえてTOYOTAとするのか。ここには、ローマ字が担う「かっこよさ」と「国際性(そのまま外国にも通じる可能性)」にあるのだと思われる。TORAYもSONYも、明らかに英語文化にもぐり込もうとする姿勢にある。

次に、おそらく数の上で最高なのは、各種の略語などである。mなど正に国際性のあるローマ字で、これが不動産屋の広告に何回も出てくる。「平米(へいべい)」という漢字表記の言葉があるのに、どうも嫌われているようだ。mを読むのには「ヘイベイ」が多く、「ヘイハウメートル」は用いられていないだろう。また「平成」のHも慣用になりつつある。m, Hの程度ならばだれでも近づけるが、電気製品や電子機器の広告は、専門的なローマ字表記で、筆者には遠い存在である。理解できないから調べようとしても、何に当たったらいいのか、それが分からない。kbps, DSTN, IMB, YBAM, GB E-IDE HDD…これらは一体何なのか。

それ以外に、会社名などの固有名詞でない、普通の日本語をローマ字で書くことは、広告などではほとんどないと言っていい。

### 2. 新聞の広告紙面に見るローマ字

1997年6月21日から27日までの1週間、朝日新聞東京版の朝刊だけについて、しかも、1ページ広告(1/4)、半ページ広告(1/2)、以下1/4広告までの、比較的紙面の広い広告だけについて、ローマ字使用の実態を調べてみたものがある。聞くところによると、この新聞のこの種の広告欄の広告料は、大変高額だという。であれば、そこに書く言葉も文字も当然厳選されるのだと思う。効果のない、無駄な広告はどの会社も望んでいない。

こういう場面に出て来るローマ字はどういうものがあるのか。まず、上の条件に合うものの件数は266。そこでローマ字が占める場所は4,375箇所。ここでいう「ローマ字の個所数」は、a, b, c…という字母単位ではなく、一続きのローマ字(の単語も文も)も1個と数えた数である。だか

\* 東京大学名誉教授、専門用語研究会会長

ら、1つの特定の広告紙面には平均10.7個のローマ字が出てくることになる。この数字が多いのか少ないのかは、他の資料を持ち合わせないので、比較のしようがない。

その内容は冒頭の1. に要約したようなものである。英語は、単語だけでなく、Always entertainment, Today's Research for Tomorrow's Health, Where do you want to go today? のような完全な文の形のさえある。企業名のローマ字は、英文のなかでもそのままの形(表記)で変わらないし、略語の多くもそうであろう。すると、日本語の漢字仮名交り文は、表層は漢字仮名ローマ交り文であるが、その内容は、実は日本語・英語交り文である。

266件の広告紙面において、ローマ字の個数とヨコ書き、タテ書きとの関係を見ると、

ヨコ書き	3,548.5個
タテ書き	846.5個

少数点以下の数字が出ているのは、ひとつの広告の中にタテ書きとヨコ書きが同居していることがあり、これらは双方へ0.5個ずつ加えたためである。圧倒的に、すなわち4.2倍の勢いでヨコ書きのもののほうがローマ字の数が多。

このことは、別の分析でも明らかになる。

ローマ字の個数の一番多いものとして、1/6の比較的狭い紙面に232個という、秋葉原の電気製品店群の広告がある。第2位以下は、

173個	NEC	1/4
147個	東芝	1/4
110個	朝日新聞	1/4
99個	日本DEC	1/2
99個	ダンスミュージックCD	1/3

であって、以上の6例はすべてヨコ書きである。

それに対して、ローマ字を全く含まない広告も6件ある。

○ フジテレビ(おわび)	1/4	タテ
○ 丸大食品	1/2	ヨコ
○ 週刊新潮	1/3	タテ
○ 週刊女性	1/3	タテ
○ 都民共済	1/3	タテ
○ 薬品	1/3	タテ

6件のうち5件までがタテ書きである。

新聞の本文はタテ書きなのに広告は80.7%がヨコ書きである。ヨコ書きだとローマ字を用いやすくなるのらしい。あるいは、ローマ字を用いたためにヨコ書きを選んだのかもしれない。

いずれもヨコ書きとローマ字の数が深い関係にあることを知る。今や公的文書はヨコ書きとなり、学生たちのノートは例外なくヨコ書き、若い世代の手紙もヨコ書きばかりのように見える。国語辞書までヨコ書きのものが出ている。集英社が同一内容の国語辞書をタテ書きとヨコ書きで同時に発売したが、ほとんど同じ程度に売れているという情報もある。こう考えると、ヨコ書きのいっそうの普及(21世紀中には、新聞がヨコ書きになるだろうし、文学のうち俳句・短歌・詩といったものがそれに追隨するだろう)に伴ってローマ字の使用も当然ふえることが予想される。

ところが、現在のこの種の広告に、普通の言葉をローマ字で書くことはめったにない。4,375個のうち1, 2例といったところである。

「いざという時の安全確保に「セイフティーハンマー」をどうぞ」という広告(1/6の広告のごく一部分を占める)に、漫画でガラスをPARINと割ることを示すPARINという言葉と表記が該当例である。(1997. 6. 26. ヨコ, AUTOBACKS)

秋田書店の漫画の広告にAkita Bunkoが出ている(1/6, 1997. 6. 26. タテ, ヨコ)。これは固有名詞と見れば対象外となる。しかし、Akita BooksとかAkita Libraryとしなかったことに注目したい。普通の日本語をローマ字で書いているからである。

もうひとつ。新潮社の本の広告(1/6, 1997. 6. 25. タテ)に、荒木経惟という写真家の名と「花曲」という書名を漢字で書いた上で、改めてローマ字でNobuyoshi Araki, Kakyokuと書いている。人名も書名も固有名詞だから、これは対象外である。しかし、この本に限って、ローマ字書きが添えてあることに注目したい。

先ごろ、「失楽園」という小説に基づく映画の広告に、数行のローマ字文が用いられた。新聞紙上だけでなく、JRの駅の階段にさえ同じ広告が張ってあった。「花曲」と共通するのは、漢字仮名交り文では、どぎつというか、生ぐさいとい

うか、そういう内容で、そのショックを柔らげるためのローマ字文のように見える。これは、啄木の「ローマ字日記」が家人に読まれることを恐れてローマ字で書いたのと同一線上にある。

このように日本語をローマ字で書くということは、新聞広告の紙面では、文や語句については言うまでもなく、単語のレベルでもほとんど現れないと言っている。

### 3. 学術用語集のローマ字

では、現代、日本語をローマ字で書くことが全くないかと言えば、文部省の学術用語集における伝統あるローマ字表記がある。これについては、青戸邦夫さんのご説明があると思うので、深入りすることは避けたい。

ただ、なぜ、すべての学術用語集にローマ字が添えてあるのか、その理由は必ずしも明らかでない。わたしは長くこの委員会の委員をつとめているが、10年以上も前のある日、このことが論議された。その理由として出てきたのは、①ふりがなの代り、②外国人用の2点だったと思う。もし①ならば仮名でも間に合うのではないかという反論に答えることができない。②は、確かに理由として成立する。しかし、そのローマ字表記に問題はないのか。原語の英語名などに匹敵する日本語名(ローマ字書き)になりうるかという点である。

問題は、ハイフェンがやたらに多いことである。tairikukan-dandô-misairu(航空学)はハイフェンが2回出てくる。これなどは珍しい例ではない。さらに、Risyorumu-nezire-tayô-yôsekigata-assyukuki(船舶学)のようにハイフェン4回という例さえある。

前者の例は、tairikukan dandô misairu でいいし、後者の例は Risyorumu nezire tayô yôsekigata assyukuki でいい。英語もこれにきちんと対応している。すなわち、intercontinental ballistic missile、そして Lysholm helical lobe positive displacement type compressor である。後者については、英語に合わせて、また、この場合、それが日本語にも合っているが、yôsekigata と離して書くことも考えられる。

ハイフェンは、もともとと臨時的結合のときだけ

に利用すべきだと思う。

なお、ローマ字つづりも英語つづりを考慮した中間形も研究すべきである。misairu ではなく misail とか、Risyorumu ではなく Lysyolm とか。現状ではいかにも振り仮名の代用といった感じである。ローマ字でばかり日本語の文章を書くようになれば、misail も misailu も検討の対象になる。

### 4. ローマ字でしか読めない刊行物

学術用語のローマ字表記は、漢字仮名表記に添えられた二次的表記である。現代の日本で、ローマ字文でしか読めないものはちょっと見当たらない。かつて大正デモクラシーのころには、田丸卓郎の Rikigaku, Rikigaku no Kyôkasyo, 寺田寅彦の Umi no Buturigaku など学術書や教科書が全巻ローマ字で書かれたものがいくつもある。これで Rikigaku を学んだ学生や Umi no Buturigaku を勉強した若者がいたのである。それに匹敵するのは現代書かれていない。

ただ一例、珍しいケースがある。若者向けのファッション雑誌(季刊) Zyappu (Jap., つまり日本人の蔑称を逆手にとって雑誌名とし、ローマ字で書く)が今までも雑誌の全ページの何分の1かをローマ字文で埋めていたが、この7月25日に出た秋号からは全ページローマ字文である。今後この方針で行くとのこと。ローマ字採用の理由は、①かっこよさ、②国際性。ここには国字論や機械文明論(能率論)はない。

### 5. 多くの人がローマ字で“書いている”

ローマ字で書かれた日本語の文章の例は極めて少ないが、ローマ字で日本語を「書く」ことは、実はひんぱんに行われている。ワープロやパソコンの日本語入力である。多数の人が実はローマ字で入力しているという実態がある。仮名のキーはあっても、それによらずローマ字で入力するのは、キーの数が47対19の割合で少ないことによる。

広告会社の博報堂で、主としてその社員を対象に調査したものがあつた。関係者の Ikeda 氏が提供して下さった情報である。

アンケートの第1問は、「普通パソコン・ワープロを使うとき入力の方式はどうしていますか。

(a)ローマ字入力, (b)仮名入力」であるが, その回答は, 50人が(a), 3人だけが(b)である。なんと94.3%の人がローマ字で入力している。仮名入力の3人のうち2人は, 高校で仮名入力を習ったからだと説明している。(「ローマ字の日本」523号, 日本のローマ字社発行. 1997. 7. 1)

ローマ字として出力こそしないが, ローマ字でいわば「書く」ことが日常広く行われているのである。考えてみると, 入力されたローマ字がそのまま出力されても, それはローマ字日本語として通用して悪くないのに, ローマ字は仮名を経由して漢字仮名表記を出力させている。日本語の出力という点ではむだなことをしていることになる。

### 6. 第三のつづり

ところで, その入力のローマ字は, いままでのヘボン式とも日本式(訓令式)とも違う。

例えば, 「私はいなかの高校を卒業してから東京に出て来ました。」という一文は,

Watashi ha inaka no koukou wo sotsugyou shite kara toukyou ni dete kimashita.

あるいは

Watasi ha inaka no koukou wo sotugyou site kara toukyou ni dete kimasita.

と入力する必要がある。前者はヘボン式仕立て, 後者は日本式(訓令式)仕立てである。しかし, いま, その違いは問題ではない。koukou, sotsugyou (sotugyou), toukyouに見られる長音の書き方である。ヘボン式ではkōkō, sotsugyō, tōkyō, 日本式ではkōkō, sotugyō, tōkyōと書いてきた長音ōをouと書くのである。これは, 日本語の音(韻)を書いているのではなく, 仮名表記をローマ字でなぞっている(転写している)ものである。だから,

kouri 欄	ouyou 応用
koori 氷	ooyoo 大様

のように書き分けなければならない。仮名で「欄」は「こうり」, 「氷」は「こおり」だからである。音韻として全く同じ[ko : ri]なのにである。

さらに, 上の文例で言うと, 「私」の第1音(第1音節)と「私は」の「は」の音とは全く同じ[wa]なのに, このローマ字入力ではwaと

haの書き分けが必要になる。仮名では, 一方を「わ」, 他方を「は」と書くからである。

しかし, この種のkoukou, toukyou式のつづりは, ワープロ・パソコンの普及とともに急速に広まり, 店の名前や商用車の胴体にこの種のつづりが珍しくないどころか一般化しつつある。kōkō, tōkyōはもちろん, これらの便法としてのkookoo, tookyooも一般には見ることがない。

今や, ヘボン式, 日本式と並んで, この「仮名式」というか「ワープロ式」というか, 第三のつづりは無視できなくなりつつある。社団法人の日本ローマ字会(京都)までがこれを会の正式のつづりとして認める方向に動いている。

### 7. ヘボン式の勢い

ところで, 先の新聞広告調査では, 4,375個のローマ字は, どの式とも判定しかねる, ニュートラルな例(Toyota, Bunkoなど)のほかは, すべてヘボン式である。これは, 広告におけるローマ字日本語は, 英語めかして使っているか, 英語の単語として(例えばTOYOTA)使っているかのせいであろう。

ヘボン式は, 英語を母語とする者が英語風に, あるいは英語式表記法で日本語を写したものである。[ʃi] (ship)と[si] (sip)の区別のある英語では, shiとsiで区別する必要があるが, 日本語では[ji]と[si]で単語(意味)を区別することはない。[e : bi : ʃi] (エービーシー)も[e : bi : si] (エーブージー)も日本人にとって同じ音韻である。音声としては別に聞こえても, この音の違いで単語を区別することはないのである。

「船」をヘボン式ではfuneと書く。fは, くちびると歯の間からもれる音であるが, 日本語の「ふ」の子音は, 喉または両唇の間から出て来る音である。英語でhuと書くと, [hʌ]か[hju:]を表わすので, fuのほうがまだ日本語に近いところから採用されたものであろう。その上, 「は」「ほ」がha, hoなら, 「ふ」はhuであると日本人の頭の中できちんと整頓されているのに, ハ行の中でfだけ別の書き方になっている。日本語の音と音との関係, 全体の状況を無視して当てたローマ字である。

明治以後で言えば、ヘボン式は日本式よりも少し歴史が古い上に、強力な英語教育に支えられて広く普及した。

日本式ローマ字は、先に紹介したように、学問的な著書や教科書で書かれ、学者や学生の間で読まれてきた。しかし、ヘボン式ローマ字にはこの種の学術的な労作はひとつもない。このことも、ヘボン式が便宜的なメモ用の文字に過ぎず、ローマ字国字論（ローマ字を将来の日本の正書法にしようという論）を背景にした日本式ローマ字とは文化的基盤が異なることを意味する。

## 8. 内閣訓令による訓令式

明治以降、両式の論争、闘争が激しくなり、国際的にも不統一が指摘され、実務的にも困ることが起きて、ついに昭和に入ってから文部省による臨時ローマ字調査会が持たれ、「訓令式」と言われる日本式とほぼ同じ（ただし、長音をoでなくoとする）ものが内閣訓令第3号として出た。1937年9月21日のことである。日本式が認められたのは、当時、世界の言語学界で盛んになろうとしていた音韻論による勝利である。日本語の音を相互に区別するのに、ぎりぎりこれだけは必要であるが、これ以上は不要という観点から文字を選び、さらに、日本人の頭の中にある音韻組織に逆らわないように整えたのである。日本人のための、日本語の、だからこそ、これが真に国際的なつづりということになった。

ローマ字つづりについても、「国際化」とは「アメリカ化」と誤解されている。同じ [j] も、英語では shi と書き、フランス語では chi と書き、ドイツ語では schi と書き、トルコ語では si と書き、そして日本語では si と書く。それぞれの言語にふさわしいつづりをそれぞれで使い、それを互いに認め合うというのが真の「国際化」と考える。

いったん収まったかに見えたローマ字つづりの問題は、敗戦後、マッカーサー指令第2号（1945-09-03）によって元へ引きもどされた。ヘボン式のヘボン博士もアメリカの医師、マッカーサーも勝利国アメリカの将軍である。このマッカーサー指令は、占領終了後も生き続けるというより、戦後の政治的、経済的、文化的アメリカ一辺倒を背

景にむしろ勢力を伸ばしてきた。ローマ字つづりについては占領は終わっていない。しかし、内閣訓令第3号も死んでいない。官庁はすべてこれに従っているはず（でなければ内閣訓令違反となる）であるが、実態はどうであろうか。

## 9. ISO3602が認めた訓令式

さらに、1989年9月1日、国際標準化機構（ISO）では、日本語のローマ字転写は「訓令式」と正式に認めた（ISO3602）。それに対応して、日本工業標準調査会は日本工業規格（JISZ8301-1982）の「ヘボン式」を「訓令式」に改定した。

しかし、この国際的圧力も街のローマ字には何の影響も与えていないようである。小学校教育にもローマ字教育がとりあげられ、訓令式を基本にわずかな時間ながら、ローマ字を、4年生・5年生で学んできているはずなのに、彼らは社会に出るとヘボン式を使い、また、koukou という「仮名式」を使っているのである。ローマ字教育の効果はほとんど認められない。

現在、日本式もしくは訓令式が正式に使われているのは、先にとりあげた学術用語集、国会図書館の検索カード、海上保安庁水路部の電子海図などであるが、これはすべて官庁のことで、内閣訓令第3号に従っていて当然である。

アメリカの日本語学（日本語の言語学的研究）の分野では訓令式で、その伝統は守られている。したがって、その系統の日本語教科書は訓令式である。

## 10. 自覚するか否か

そして、先に紹介したファッション雑誌 Zyappu は、はじめヘボン式と仮名式を混ぜたものだったが、ことしの夏号からは ISO3602、つまり訓令式によるローマ字に統一された。ここでは訓令に従ったのではない。自らいいと考えて、自分らの責任で全巻ローマ字の雑誌を出している。

日本人ひとりひとりが Zyappu の編集部と同様に自覚の機会を持ち、理論的に正しいものを採用すべきだと思う。真の国際化は実は「日本化」でもあることを知るべきである。

～特集：ローマ字問題を考える～

## ローマ字の正書法 Latinlitera ortografio de la japana

ヤマサキ セイコー\* YAMASAKI Seikō

### 1. ヘボン式の理論

ヘボン式は理論的には論破されてしまっていると言えましょう。言語学者で訓令式を支持しないのは服部四郎博士だけではないでしょうか（それも「チ・ツ」を「ci, cu」にするとところが違うだけです：これはフォネミックとモルフォフォネミックの違いです）。これにここで深入りすることは場違いですので、最新のものをひとつだけ文献として言及すれば山田尚勇さんのものがあります<sup>1)</sup>。山田さんは専門用語研究会の総会でGalinskiさん、鈴木孝夫さんとともに基調講演をなさいました<sup>2)</sup>。

### 2. ヘボン式の国際性への疑問

ヘボン式が論拠としているのは、「広く使われている」ということ以外にはなくなっています。しかし中国はあのピンインを全世界に強制し、ついにISO国際規格 (ISO 7098) にしました。<sup>3)</sup> アメリカは抗議しましたが、結局従わざるをえませんでした。国論の統一されている国の強さです。これを全体主義のためだと難ずることは簡単です。しかし中国は10年掛けてあらゆる代替案を比較検討した後で決めています。決まった後は一意専心それを推進し、超大国アメリカの言うことを意に介しませんでした。

ヘボン式の国際性は英語を押しつけられて各国が従っている結果の国際性です。規格化という意味では進歩ですが、同じ規格化なら日本式の規格化の方がいいに決まっています。

### 3. ヘボン式存続の政治的事情

ヘボン式が存続しているのは、国際性というよ

う「理論」ではなく、外務省（旅券）、運輸省（駅名表示）、建設省（道路標識）がその使用を強制しているという制度的、政治的な要因です。ここにも一度決められたものは変えないと言う官僚気質が表れています。現状は戦争中よりも悪くなっています。戦争中の英語の教科書の中の日本語固有名詞表記は訓令式に統一されていましたし、和英辞書も研究社が抵抗していた（これは国粋主義に対する無言の批判として評価されなくはないでしょうが、やや見当外れの観があります）以外は訓令式が多かったのです（たとえば三省堂など）。こういう問題になると、どこにも顔を出す「東京裁判史観」反対論者が何も言わなくなるのは興味ある事実です。

ヘボン式支配の原因は占領軍の政策にあります。しかしそれはローマ字で書かれた道路標識が日本の都市になかったので（道路に名前がなかったということがもっと根本にありましたが）、占領行政のために緊急待避的な施策をしたのであって、占領軍の日本の言語・文字政策への介入はそれほどではなかったと言えます<sup>4)</sup>。たしかに訓令式が改めて内閣告示で確認されたのは平和条約後の1954年、吉田内閣のときですが、これは「独立」とは関係がないと思います。識者が集まって討論すれば結果はいつも訓令式になります。

### 4. アメリカの圧力

本会の大塚前会長の努力で決まったISO国際規格 (ISO 3602) を変えようという動きがあるときいています。ひとえに日本政府の態度がはっきりしないためです。ISOで日本政府に意見を聞くと、「こういう方式もあるし、こういう方式もある」という返事が得られるのではイライラして、「はっきりしろ」と言いたくなるのは当然でしょう。文部省（または文化庁）は他の省庁に遠慮し

\* 働物産研修センター ランゲージ サービス



て訓令式の番人である立場を忘れて腰砕けになるわけです。それを如実に示すのは日本の地名の国際表記をめぐる問題です。アメリカは他国の正書法に自己の意志を押しつけるという内政干渉を行いました<sup>5)</sup>。アメリカ側の当事者は「日本の国内のことを言っているのではない。国際表記の規格化が問題なのである」といおう客観性を装っていますが、国内向けと国外向けと違う正書法を取することは不可能に近いでしょう。

アメリカの内政干渉はこれのみにとどまりません。1962年視察旅行に赴いた鈴木国会図書館長は Library of Congress から強い圧力を受け、1964年1月館長決定により訓令式からヘボン式への切り替えを強行しようとしたが、職員組合はじめ館外諸団体の強い反対運動のために挫折しました。1971年国際民間航空機関 (ICAO) 総会で訓令式からヘボン式へ改めるようにとのアメリカの強硬な要請に押し切れられ、同年航空図のローマ字表記はヘボン式に変更されました<sup>6)</sup>。天安門事件について発言するのは人権という普遍的な価値のため、内政干渉と呼ぶのには疑問がありますが、正書法はその言語の使用者が決めるべきことでしょう。なにしろ米国通商代表 (USTR) が日本語の使用そのものが非関税障壁だというような国ですから、なんでも通ると思っているのでしょう。地名標準化会議でヘボン式採用のアメリカ提案が通らなかったのも日本政府の努力ではなくて、ドイツ、ソ連、オランダ、キューバが反対したためです<sup>6)</sup>。

戦後の言語風景の特徴は日本のみならず世界的な英語の覇権です。戦前は少なくとも日本の知識階級の間では英独仏の比重は同じでした。これを英語が国際語として確立したことであり、進歩の表徴であるとする人もいます。しかし英語しか知らない人が増えることによって、複眼的な思考は支えを失ったのであります。英米人の眼で世界を眺める人がこの国の各界で猛威を振っています<sup>7)</sup>。

ISO 3602 は transcription と transliteration とを同時に扱っているため、混乱を招きがちです。現に京都の日本ローマ字会 (日本のローマ字社ではなく) には *o* のかわりに *ou* を使おうという有

力な意見があります (これはワープロの漢字変換から特に若者の間に広がりつつある表記ですが<sup>8)</sup>)。しかし訓令式はカナの代用品ではありません。日本語の音韻体系から直接に (無媒介に) つくられた正書法ですから<sup>9)</sup>、歴史的かな使いとの妥協の産物である現代カナヅカイとのあいだに一対一対応はありません<sup>10)</sup>。これはロシア語のようにラテン文字での綴りが一定していない言語と日本語の大きな違いです。アメリカの議会図書館の目録規則ではキリル文字とのあいだに *biunivocité* がありさえすればいいわけで、diacritical marks のたくさん付いた醜いものになっていますが、これは目的が違うのです。

ヘボン式といえども長音の表記はあるわけですが、論文の筆者の表記で macron や accent circonflexe の付いているのをほとんど見ません。ということは、あれは文字ではなくて、目印にすぎないわけです。ときには *Dehnungs-h* を使って、たとえば大井さんは *Ohi* と書いたりしますが、「おひさん」と読まれるかも知れません。アメリカ人に発音できるようにだったら、新宿は *Shinjick*、吉祥寺は *Kitch-George* にでもすればいいでしょう。これで日本の言語的植民地化は完成に一歩近づきます。

## 5. 刊行物での人名のローマ字表記

専門用語研究会の機関誌では、執筆者名のローマ字表示はその人の希望のとおりに行っているようです。第8号の柴田会長の大塚前会長への「*Owakare no kotoba*」、宮島達夫さんのもの (専門の日本語学者だから当然ですが)、第12号の高橋裕さんのものは訓令式です。この方針は貫いていただきたいです。特に指定のない人は当然編集者は現行の基準、すなわち訓令式に統一すべきです。姓を大文字で書けばまちがえる恐れはありません。フォントがあれば、小型大文字 (small capitals) を使うほうが *esthétique* です (小林英夫さんは、一貫して小型大文字を使っています: たとえば『言語学通論』などで)。大文字で書くのは、フランスではごく普通で、戦前からの東和商事輸入のフランス映画の *credit title* でおなじみでしょう。

## 6. ローマ字の使用可能な分野

以上は正書法について申し上げたわけですが、もうひとつ、もっと一般的に当会でもローマ字の使用そのものを促進することに努めるべきだと思います。

この面でも戦後は戦前と比べて明らかに後退しています。これはローマ字論とは関係なく主張できる論点です。むかしは田丸卓郎が『Rikigaku』を書き、寺田寅彦が『Umi no Buturigaku』を著したのは別として、ちょっと思い出すだけでも岩波の哲学辞典や数学辞典は見出し語がローマ字でした。「パウロ」<sup>18)</sup>は「Pauro」で引くと「Paulos」が示されていますし、「senkenteki」を引くと「先験的」が出て来ます。「カント」などははじめから「Kant」で引きます。

最近のローマ字の後退はひどくて、和英などの日本語からの辞書すら見出し語をカナ引きにするのが風潮です（研究社などの老舗はローマ字引きを守っていますが）。このため日本語を始める外国人はもっぱら研究社の和英辞典を使います（アクセントが示してあるという別の利点もさることながら）。日本人のための日本語辞書が引けるようになるまでは外国人は外国語を学ぶ日本人用の辞書は使えないのです。Mansion-Harrapの仏英・英仏はイギリス人もフランス人も引きますのに。Langenscheidtも同じです。また専門用語の辞書を日本語の知識がなくて引くことはできません。そんな必要はないように考えられますが、これはよくあります。わたしは 에스ペ란토 の政治・経済用語の辞書の編集に委員の一人として参加したことがあります。説明は 에스ペ란토 ですが、各用語に9言語の術語が付記してあります（これは native の編集委員が入れました）。漢字を入れるのはとても採算が取れませんので、ローマ字だけにしました。中国語についてもそうです<sup>19)</sup>。これで十分重宝されているようです。日本語・中国語を知らない人でも音は分かるし（中国語には声調が示してあります）、日本語・中国語を知っている人は容易に漢字を当てはめられます（漢字を廃止すると homonym が多くてなにがなんだか分からなくなるというのは神話です）。

辞書の見出し語だけではありません。日本でも

索引のない専門書は今やなくなって、この点でも国際化しましたが、これが日本語の部と外国語の部の二本立てです。ローマ字にして一本にすべきです。索引が外国語はローマ字、日本語はかなにしているため、二元的になり、不便です。一元的になれば日本語と外国語が混在して不便だという議論があるかもしれません。しかし西洋で本で、外国語には別の索引があるなどということはあまり聞いたことがありません（ロシア語の本にはありますが）。区別するには外国語を斜体にするのが標準です。画期的なものや評価されているロシアの Сергей Покровский のコンピューター用語辞書<sup>20)</sup>は、見出し語は英語と 에스ペ란토 の二本立てで混在していますが、少しも引きにくくありません。日本語の索引でも「computer」と「konpyūta(a)」と「keisanki」が同じ扱いになればいいわけです<sup>21)</sup>。近ごろよく見るのは、外国語の索引の後に日本語の索引がもうしわけのようにくっついているのは日本語そのものが符号になってしまったような気がします。五十音順そのものが国際的でない、parochial な感じを与えます。

## 参 照 文 献

- 1) TATUOKA Hiroshi 及び YAMADA Hisao. 1996. 「On the theory and practice of the Romanized writing system for Japanese」. 『学術情報センター紀要』第8号. 東京: 学術情報センター.
- 2) 第3回専門用語シンポジウム (1990年)
- 3) ピンインのほうがWade式よりすぐれていることはだれも認めるでしょう。わたしはちょっと修正を加えれば（舌面音の表示が二とおりあるのを z, c, s にまとめる: これは藤堂博士の『中国語音韻論』など通説と言っていいでしょう）北拉 (Beila, ラテン化新文字) のほうがいいと思いますが、これは一度決まったことですから守り育てるべきでしょう。
- 4) アメリカ教育使節団の報告の中で「日本語をローマ字表記にせよ」と言う項目がまったく無視されたこともこれを示しています。ローマ字教育はさかんに行われましたが、これは

アメリカの影響ではなく、戦前からのローマ字運動が戦後民主主義の風潮に乗って実を結んだものです。

- 5) YANO Yūzi. 1993. 「国際連合地名標準化会議について」. 『Rōmazi no Nippon』1993年5月号. 東京：日本のローマ字社.
- 6) YANO. 1993.
- 7) 『日本経済新聞』は日ごろは客観的な報道の本領を離れて、「英語ができなければ国が危ない」という sensationnel な社説を載せ (1997年6月8日号)、「英語帝国主義」などという批判は的外れだ」と書いていますが、これこそ射っているのです。鈴木孝夫さんはじめ、いわゆる Englic 論者は英語はイギリスやアメリカのものではなく、どの国にも属さない中立的な言語だと言いますが、そうではありません。Queen's English あるいは BBC English や General American という規範があり、それからの距離による価値のヒエラルキーが存在するのであり、Japanese accent の英語などが尊敬されることはありません。口には出さなくてもばかにされるだけです。Englic 論者自身は Englic どころではない、立派な native に近い英語を操る人たちであり、俗衆の一段上に立って非現実的な Englic 論を語っているわけで、これは double standard そのものです。
- 8) ローマ字の正書法から直接に漢字変換するソフトは開発されています。
- 9) ローマ字は日本の文字 (一部の人に ethnocentrism として忌避されている語を使えば「国字」) であることが意識されていないようです。日本の文字はカナと漢字だけではありません。アラビア (ほんとうはインドでしょうが) 数字とローマ字がそうです。初等教育で cm や kg を教えています。日本語の中で使います。中等教育でギリシャ文字を数学などで使いますが、すべての文字を使うわけでなく、また発音も習いません。だから日本の文字とは言えません。ローマ字教育は駅名のローマ字表示が読めるようになることぐらいしか効用がないと嘲笑されていますが、たとえばこ

どもの早期漢字教育で有名な石井勲先生はローマ字を「国語」教育に使っています。先生の漢字カードには例えば、「補」の音は「ho」, 「敷」の音は「hu」で、発音記号としての「甫 (h)」がはいっている、というように理詰めです (だから「敷」の偏の上の部分の縦線3本の下が突き出していないのは石井先生にとっては困るのです)。これはカナでは不可能です。先生にとってはこどもがローマ字を知っているのは当然の前提です。訓令式はいくつもある綴字のひとつ、文字より低級なシルシの使い方のひとつではなく、日本語を使う人びとの文化の構造の一部をなす正書法です。

- 10) 現代かなづかいは歴史的産物として客観的な存在となり、一定の役割を果たしましたから、これは存続するでしょうし、すべきですが。
- 11) わたしはカトリックあるいは合同訳の「パウロス」はすきではありません。機能形態素を省いて語幹だけを残した明治初期の前人の知恵を尊く思うもの一人です。
- 12) 中国人の編集者が漢字を入れることを主張しましたが抑えました。社会主義国中国の知識階級は魯迅、瞿秋白の革命的伝統を忘れてしまっ、保守化しています。問題意識すらありません。これは日本の「革新派」も同じです。
- 13) POKROVSKIJ, Sergej Borisovič. 1995. 『Komputika leksikono』. Jekaterinburg: Sezonoj.
- 14) 計算機とコンピューターは違うという非難があるでしょうが、いま計算機というのは電子計算機のことであり、そう言ってもなんの混乱も起こりません。手回しの計算機などを思い浮かべる人はいないでしょう。混乱が起こりそうなどときには specific な用語を使えばいいのです。

～特集：ローマ字問題を考える～

## ローマ字による学術用語の書き表し方

青戸 邦夫・ AOTO Kunio

### 1. 歴史的展望<sup>1)</sup>

日本語のローマ字書きの源流は、1549(天文18)年フランスコ・ド・ザビエルの鹿児島上陸に始まり、キリスト教の宣教師が著した教義書のキリシタン版に遡及する。

往時、ポルトガル語、ラテン語、スペイン語、後の江戸時代には蘭学者のオランダ語、さらにドイツ語、フランス語、明治維新の前後では英語の発音表現に基づくローマ字書きが考案された。

1867(慶応3)年刊のジェーム・ヘボン(J. C. Hepburn)編集『和英語林集成』は、第2版以後に内容が改められたが、1885(明治18年)に羅馬字会が設立されて英語式のローマ字を基本としたのを契機に、本書の第3版にこれが採用されて、ヘボン式として広く行われた。1908(明治41)年にローマ字ひろめ会で多少修正されて、修正ヘボン式または標準式と呼ばれた。

1886(明治19)年に田中館愛橘は、この英語式の欠点を指摘して、“Romaji Sinsi”を刊行し、日本式つづり方の基礎を築いた。日本式を主張する人々は、1909(明治42)年に日本のローマ字社、さらに1921(大正10)年に日本ローマ字会を組織した。

このほか、明治初期以来、新しい文字の考案があったが、それは行われず、ヘボン式(標準式)と日本式との対立が続いた。

### 2. ローマ字つづり方の統一<sup>2)</sup>

1928(昭和3)年に万国地理学会議は、日本の地名のローマ字つづり方を一定にされたい旨の希望を、日本代表を通じて日本政府に伝えた。これ

が動機となり、政府は、教育上・学術上また国際関係上、ローマ字のつづり方を統一するため、1930(昭和5)年に臨時ローマ字調査会を設けてその審議に着手し、1937(昭和12)年9月21日に内閣訓令第3号として「国語ノローマ字綴方」を定めた。これは官庁を中心に行われたが、その後の戦時中にはローマ字運動は下火となる。

### 3. 戦後のローマ字つづり方の単一化<sup>3)</sup>

1946(昭和21)年3月に提出された米国教育使節団報告書の「国語の改革」の章に「1. ある形のローマ字を是非とも一般に採用すること。2. 選ぶべき特殊の形のローマ字は、日本の学者、教育権威者及び政治家より成る委員会がこれを決定すること。(以下省略)」とあり、これによって昭和22年度から国民学校においてローマ字教育が行われることになった。義務教育における学習指導では、一般社会で使われているつづり方として、いわゆる標準式(ヘボン式)・日本式・訓令式(昭和12年内閣訓令第3号)の3式の中から自由に採択することができる暫定措置によって実施された。

1948(昭和23)年10月にローマ字調査会が文部省に設けられ、本格的にローマ字に関する調査研究に着手したが、途中で制度が変わり、1949(昭和24)年6月にローマ字調査審議会に、1950(昭和25)年4月に国語審議会ローマ字調査分科審議会にと変遷した。

国語審議会は、教育現場の強い要望にこたえて「ローマ字つづり方の単一化について」(昭和28年3月12日 国語審議会建議)を文部大臣に建議し、政府はこれに基づいて「ローマ字のつづり方」(昭和29年12月9日 内閣告示第1号。以下「告示」という。)を告示した。

\* 学術情報センター 学術情報研究調査員  
元 文部省学術国際局 学術調査官

#### 4. 戦後の学術用語の標準化

1946(昭和21)年11月に「当用漢字表」と「現代かなづかい」とが、内閣告示及び内閣訓令で制定・公布されたのを契機に、改めて学界・教育界から学術用語を平易・簡明なものに統一することの要望があり、文部省では1947(昭和22)年2月に新しい学術標準用語を制定する事業に着手した。

その後、1981(昭和56)年10月に「常用漢字表」が、また1986(昭和61)年7月に「現代仮名遣い」が、それらに代わって制定・公布されたが、この事業は一貫して今日まで継承されている。

文部省の審議会の答申に基づいて制定された学術用語は、文部省編『学術用語集』シリーズの28編【増訂版11編、増訂2版2編。延現行用語数約19万4千語】として編集・刊行されている。

#### 5. 『学術用語集』のローマ字表記<sup>4)</sup>

学術用語の制定事業は、発足当初は占領下であり、文部行政は連合国軍総司令部民間情報教育局(GHQ・CIE)の承認なしには運ばれなかった。『学術用語集』では用語の読み方をローマ字書きで示しているのは、その意向による。そのローマ字のつづり方は、前述の義務教育における暫定措置と同様に、学術用語の標準化に係る関連学会は3式の中から慣用する方式を採択してよいとされた。

学術用語の制定事業の発足時には、審議会の成案を公刊して、学界、教育界及び国民一般の世論調査を行って、よりよい制定案を答申する方策を採った。

このため、学術用語調査会化学用語専門部会編『新制化学用語集』(昭和24年1月南江堂発行5,000部)及び学術奨励審議会学術用語分科審議会機械用語専門部会編『新制機械用語集』(昭和25年3月南江堂発行3,000部)が文部省監修のもとに出版された。これらの『新制用語集』では用語の読み方を、化学では日本化学会が選んだヘボン式、機械では日本機械学会が選んだ訓令式のローマ字書きで示している。

1954(昭和29)年3月に、『学術用語集』シリーズの5編が創刊されたが、前年3月に国語審議会がローマ字つづり方の単一化について建議された

のを踏まえて、同年12月の「告示」の第1表(いわゆる訓令式)によるローマ字書きを先取りした形で学術用語の読み方を示した。以来、『学術用語集』シリーズの統編は、これを踏襲している。

#### 6. ローマ字による学術用語の書き表し方

『新制化学用語集』の例言には、「ローマ字の分ち書きは原則として、英語のつづり方によったが、不自然と思われるものは慣習を尊重した。」とあり、また「ローマ字書きの不自然なものは原語のまま採用する。いいかえると transliteration をしない方針としたい。」とあって、学術用語の読み方を示すローマ字書きは確立していない。

学術用語のローマ字書きは、当初は文部省編「ローマ字文の書き方」(昭和22年2月)におおむね準拠し、後には国語審議会ローマ字調査分科審議会分ち書き部会報告(昭和27年3月10日)の「ローマ字文の分ち書きのしかた」をも採り入れた。1955(昭和30)年に『学術用語集化学編』(昭和30年4月初版)の化学用語のローマ字書きが端緒になり、文部省調査局国語課ローマ字係において用語のローマ字表記の大綱が定められた。

この大綱は、『化学編』以後の統編にも準用されたが、やがて用語集の編集経験を積み、『学術用語集』シリーズの各編に共用の用語の読み方を示すローマ字書きの規定を整備することになった。当時、文部省で学術用語制定事業を担当した筆者は、天沼 寧国語課専門員、大塚明郎学術審議会専門委員(元国語審議会ローマ字調査分科審議会委員)など大方の御意見を承わって成分化を図り、1974(昭和49)年1月に文部省大学学術局情報図書館課において、「告示」の第1表の適用と、その“そえがき”の各項についての具体的な取扱いなどを規定する13原則から成る「ローマ字による学術用語の書き表し方」が定められた。以後、『学術用語集』シリーズの統編には、「学術用語審査基準」とともに、この書き表し方が参考資料に掲出されている。

以下に、「原則」(通常「例示」を省略。)と筆者の補足説明である【解説】とを記す。

## ローマ字による学術用語の書き表し方

昭和49年1月

文部省大学学術局情報図書館課

この書き表し方は、文部省編集の『学術用語集』に記載する用語の読み方を示すローマ字書きについて規定する。

原則1. 用語のローマ字書きは、「ローマ字のつづり方」(昭和29年12月9日内閣告示第1号)の第1表に掲げたつづり方による。

【解説】第2表は、用いない。

原則2. はねる音「ン」は、すべてnと書く。

【解説】「告示」の“そえがき”1.による。ヘボン式では、temmongaku(天文学)、mombushô(文部省)、pompu(ポンプ)のように、m、b、pの前のnは、mに変える。「すべて」とは、英語式の変則ではなく、例えば、monbusyô(文部省)と書く意味。

原則3. はねる音を表すnと次に来る母音字又はyとを切り離す必要がある場合には、nの後に切るしるし「'」を入れる。

【解説】「告示」の“そえがき”2.による。「反応」に切るしるしを用いてhan'nôと書く誤用になる。

原則4. つまる音は、最初の子音字を重ねて表す。

【解説】「告示」の“そえがき”3.による。ヘボン式では、sh及びtsの前では、s、tだけを重ねるが、chが続く場合にはcを重ねずにtを用いる。例えば、matchi(マッチ)。この英語式の変則はなく、matti(マッチ)と書く。

原則5. 長音は、母音の上に「^」を付けて表す。

例4. ケーブル kēburu

ただし、iの長音は、iiと表記する。このため、iの長音の場合とiを重ねた音の場合との区別がつかないことも起こる。

例5. シールドケーブル siirudo-kēburu  
委員会 iinkai

【解説】「告示」の“そえがき”4.による。iの長音を例外として母音字を重ねることにしたのは、iの字形になじみがなく、不安定な印象を与えるために、文部省編「ローマ字文の書き方」(昭和24年2月)にtiisai(小さい)と例示されていて文部省著作のローマ字教科書がこれを採用したことによる。「告示」の“そえがき”の冒頭には、「おおむね次の各項による。」とあり、『学術用語集』ではiiとしても差し支えない。

原則6. 固有名詞は、語頭を大文字で書く。

【解説】「告示」の“そえがき”6.による。

原則7. 特殊音の書き表し方は、次のようにする。【「例示」は、省略。】

【解説】「告示」の“そえがき”5.では、五十音にない特殊音は自由とすると定めている。学術用語の仮名書きで、外来語及び外国の地名・人名を原語や原つづりになるべく近く書き表そうとする場合に用いられる特殊音の表記に対応するローマ字書きを、次のように規定する。

(a) ディ (di)      デュ (dyu)

(b) ファ (fa)      フィ (fi)      フェ (fe)

フォ (fo)      フュ (fyu)

備考1. 原語は f でも用語の仮名書きをハ、ヒ、フ、ヘ、ホと表記すれば, ha, hi, hu, he, ho と書く。ヘボン式では, フを fu と書く。

2. ローマ字書きには, firumu, baffa のように合字の活字体を使わない。

- |              |          |          |
|--------------|----------|----------|
| (c) クァ (kwa) | クィ (kwi) |          |
| クェ (kwe)     | クォ (kwo) |          |
| (d) シェ (syē) | チェ (tye) | ジェ (zye) |
| (e) ティ (t'i) | トゥ (t'u) |          |
| (f) ツァ (twa) | ツェ (twe) | ツォ (two) |
| (g) ウィ (wi)  | ウェ (we)  | ウォ (wo)  |

原則8. 外国の地名・人名などの固有名詞のローマ字書きは, 用語の仮名書きを基準としてつづる。

【解説】 「アイシュタインの宇宙」は, "Ainsyutain no utyū" と表記される。しかし, 一般のローマ字文中で, 固有名詞の部分本文とは別の字体(イタリック体)で原語(Einstein)のまま表記することを妨げない。

付記: 「現代仮名遣い」でオ列の長音に「ウ」を添えて表したものは, ou ではなく, ō と表記する。例えば, 硫黄 iō。

原則9. 漢語・国語だけで構成されている語は, 次のように書く。【例示】は, 省略。】

9.1 単語は, 一続きに書くことを原則とする。

9.2 複合語は, それぞれの成分語が3音節以上であるときは, つなぎ「-」を入れて書くことを原則とする。

ただし, 連濁する場合には, つなぎ「-」を入れず続けて書く。

例10. 切断といし車 setudan-toisiguruma

9.3 複合語における2音以下の成分語は, その前後の成分語と続けて書くことを原則とする。

例11. 加色法 kasyokuhō  
過充電 kazyūden

ただし, 特に意味をはっきりさせる必要がある場合, 漢字を音読する語と訓読する語とが混じる場合及び漢字2字から成るような成分語の場合には, 2音節までのものでも, つなぎ「-」を入れて書く。

例12. はちの巢放熱器 hati-no-su-hōnetuki

例13. 管配置 kuda-haiti

注: kanhaiti と読むのであれば, つなぎ「-」は不要である。

例14. 硬質磁器 kōsitsu-ziki

9.4 助詞は, 他の語から離して書く。

【解説】 分ち書きは, 「ローマ字文の分ち書きのしかた」(昭和29年3月10日の国語審議会ローマ字調査分科審議会分ち書き部会報告)を参考にし, 各専門分野の学術用語の語例を収集・分析して, 単純・明快に原則9~11を策定した。

基本原則として単語を分ち書きの単位とすると規定すると, その単語を認定する規則が複雑になり, 誰にでも使いこなせるように条項をまとめるのは困難であろう。

しかし, 上掲の原則には, 実際に用語集を編集すると画一的に適用できずに, 編者の裁量で例外扱いを設ける必然性を伴う。例えば, 心不全 sin-huzen のつなぎは, 急性心不全となる熱 kyūsei-sinhuzen として語構成を明確にし, かつ, つなぎの多用を避けて省略されよう。示差熱分析のローマ字書きは, sisanetu-bunseki か sisa-netubunseki か, 分ち書きで単語の役割がはっきり現われる。

【化学編】の編集では、硫酸銅(Ⅱ)を *ryūsan-dō(Ⅱ)* と書くと、イオン化合物が別の物質である硫酸と銅とに分解されて、科学的な合理性を失い不都合と異論が出たが、硫酸バリウム *ryūsan-bariumu* などの関連もあり、つなぎの入れ方は全般的な通則に従うことで合意した。

原則10. 外国語(原語の発音に従った語)は、大文字・小文字の使い方、つなぎ「-」の使い方、分ち書きなどは原語に従って書くのを原則とする。

例16. Edison dynamo  
エジソンダイナモ  
Ezison-dainamo

ただし、原語が1語であっても、そのままではつづりが長くて読みにくさを感じるものには、つなぎ「-」を入れて差し支えない。

例17. dichlorodifluoromethane  
ジクロロジフルオロメタン  
zikuroro-zihuruoro-metan

注：外来語もこれに準じて書く。

【解説】ドイツ語の名詞は、頭語を大文字で書くが、ローマ字書きでは、固有名詞を除き、普通名詞は小文字で書く。

原則11. 漢語・国語と外国語・外来語とが複合した言葉は、漢語・国語の部分については9の原則により、外国語・外来語の部分については10の原則によって書き、またその間にはつなぎ「-」を入れて書くのを原則とする。

【解説】原則9と原則10とを機械的に結合するので、つなぎ「-」の多用が問題になる。『言語学編』では、「ローマ字」に関しては *Rōma-zi* とせず、慣用を尊重して *Rōmazi* と書き、「ローマ字化」は *Romazi-ka* と書いて弾力的に運用されている。

原則12. A, B, C, ..., X, Y, Zなどのローマ字は、その文字をイタリック体で示す。

例19. T定規                    *T-zyōgi*  
U字管                      *U-zi-kan*  
SN比                        *SN-hi*  
X線                         *X-sen*

注：「AE剤【セメント】」(*air-entraining agent*)のローマ字書きで、AEを普通の活字体(ローマン体)で組めば [a-e] と発音し、イタリック体で組めば [ei-i:] と発音する約束である。

【解説】用語の表記にローマ字を象形文字又は略語若しくは略号として用いる場合には、そのローマ字をイタリック体として、ローマン体とは組み分けて表記する。

原則13.  $\alpha$ ,  $\beta$ ,  $\gamma$ , ...などのギリシア文字は、そのまま用いて書く。

例20.  $\alpha$ 線                     $\alpha$ -sen  
 $\lambda$ 形二重分離             $\lambda$ -gata-nizyū-bunri

【解説】用語の表記にギリシア文字を用いる場合について規定する。『学術用語集』の「和英の部」では、ギリシア文字の接頭記号をもつ語のうち、ギリシア文字を無視しては意味をなさない用語では、次のように読み換えて排列する。

$\alpha$   $\beta$   $\gamma$   $\delta$  ...  $\pi$   $\rho$  ...  $\tau$  ...  
A B G D ... P R ... T ...

なお、原則の形で条項を設けていないが、数字が用語の表記に記号又は象形文字として用いられる場合には、そのまま表記に用いる。



例えば、

鉄(Ⅱ)滴定	tetu(Ⅱ)-tekitei
8字飛行	8-zi-hikō
	(hatizi-hikō)

ローマ字書きは、用語の読み方を示すとしながら、原則12. と原則13. ではローマ字文での表記法を規定する。『航空工学編』の「和英の部」では、「8字飛行」を( )内の表音文字に基づいて排列している。

用語集において、用語の読み方を示してそれに基づいて用語を排列する場合に、仮名書きの五十音順とする場合は、「現代仮名遣い」によるか、長音符号は無視するのか母音に読み換えるのか、清音・濁音・半濁音の順位はどうするか、促音と拗音とは1音か2音かなどを規定する必要がある。ローマ字書きのABC順排列ではより簡明で国際性に優れている。

## 7. 国際規格での日本語のローマ字化

国際化・情報化が進む中で、『学術用語集』のローマ字表記をヘボン式に改めよとの根強い提案がある。敗戦に伴って、1945(昭和20)年9月3日付の連合国最高司令部指令第2号<sup>5)</sup>(ABO 500)の第2部で次のとおり命じて、これが現在に及んでいる。一般の国民の目に入るのは、駅名のヘボン式であり、訓令式の影は現状では薄い。

17 日本国政府ハ一切ノ都会自治町村及市ノ名称ガ此等ヲ連結スル公路ノ各入口ノ両側及停車場歩廊ニ少クトモ六「インチ」以上ノ文字ヲ使用シ英語ヲ以テ掲ゲラルルコトヲ確保スルモノトス名称ノ英語ヘノ転記ハ修正「ヘボン」式(「ローマ」字)ニ依ルベシ

IEC(国際電気標準会議)では、電気・電子分野の技術用語を国際電気標準用語(IEV-International Electrotechnical Vocabulary)の形で規格として定めている。この規格(IEC publication 50)では、英語・フランス語・ロシア語の定義とともにドイツ語など6か国の対応用語を掲出する。1988(昭和63)年からIEVに日本語(漢字・仮名)の用語を追加して、ヘボン式を基本とする日本語読みローマ字表記<sup>6)</sup>を添えた日本語索引からIEV用語を検索する日本語用語の作成が開始され、近年これが実現している。

一方、1989(平成元)年9月に、ISO3602 Documentation - Romanization of Japanese (kana script)が訓令式で成立した。DIS 3602ではヘボン式であったが、国際規格は当時国が採用している方式と一致すべきであるとの論拠で修正

されて、国際標準化の面で結着が付けられた。<sup>7)</sup>

日本語を書き表すのに用いるローマ字のつづり方は、ヘボン式よりも五十音図に基づいて理論的に一貫する訓令式に歩があることは、昭和初頭の臨時ローマ字調査会の検討・審議の結論であり、重ねて戦後のローマ字調査会・ローマ字調査審議会・国語審議会ローマ字調査分科審議会の調査審議の結論でもある。

国としては、「告示」とこれに伴う「ローマ字のつづり方の実施について」(昭和29年12月9日内閣訓令第1号)が効力をもつ限り、文部省編『学術用語集』のローマ字書きをヘボン式に改められないのはやむを得ない。

なお、大正2年に中央气象台が地名の表記を日本式に改め、続いて陸軍陸地測量部の地図、海軍水路部の地図の地名表記を日本式に改めた。現在でも国土地理院の百万分の一国際地図(英語版)と、海上保安庁水路の海図・水路誌(地名・海域)には、訓令式のローマ字を用いている。

また、『規格票の様式』(JIS Z8301:1996)附属書1(規定)規格の名称の付け方の9. 英文の規格の名称には、対応英語(または対応米語)がない場合には、ローマ字書きするかまたは適当な英訳を作り、ローマ字書きする場合には、「告示」の第1表(いわゆる訓令式)で表し、すべての文字を大文字とすると定め、「電気こたつ類 Electric KOTATU)」の例示を掲げている。

IECとISOとで国際規格作成の規則を統合する業務用指針が作られている。「日本語のローマ字化」におけるIECとISOとの整合化に関しては

これに該当せず、本質的には我が国の工業標準化に関与する人々によって、ローマ字問題の歴史を見つめた上で、現状を踏える方式によるか、理論的に一貫する方式によるかが判断され、当事国において解決すべき課題である。

#### 参考文献

- 1) 佐藤喜代治編 国文学研究辞典 明治書院  
269-271, 1977
- 2) 平井昌夫：ローマ字教育の理論と実際 開隆堂出版 59-66, 1947
- 3) 武部良明：日本語の表記 角川辞典-29, 26  
3-279, 1979
- 4) 青戸邦夫：文部省編『学術用語集』シリーズの編集要項, 図書館の杜 創刊号 稲門ライブラリアンの会, 39-40, 1978
- 5) 文部省編 ローマ字問題資料集(国語シリーズ23) 明治図書出版 175, 1955
- 6) 日本機械工業連合会：平成8年度IEC電気用語集の日本語用語の作成に関する報告書, 日本機械工業会・日本規格協会 10-13, 1997
- 7) 大塚明朗, 内藤衛亮：ISO/TC46総会に出席して 第1部, ドクメンテーション研究 26(8/9), 321-328, 1976

～ 特集：ローマ字問題を考える ～

## ローマ字問題を考える

井口 昌平\* Inokuti-Syōhei

### 1. はじめに

日本語をローマ字で書き表わすことは、1593年に天草で刊行された ESOPONO FABVLAS (伊曾保物語) に始まるから、ローマ字問題はすでに400年以上の歴史を持っているのでしょう。いま、ローマ字問題を語ろうとするのは、明治以来のこと、ことに田中館愛橘先生の始められたローマ字運動の行くえについて語ることがおもなことになるろう、と思います。

私は、子供のころから、日本ローマ字会の雑誌が目の前にあるような家の中にいたので、自分がおとなになるころには、ローマ字がかなり実用になっているようになっていのだらうと思っています。大学生になって、Tamaru-Takurō先生の Umi no Buturigaku を読み、卒業して間もなく力学の応用の一部の授業をするようになったのは太平洋戦争が始まったばかりのときでした。1943年ごろから流体力学の応用の講義をするようになったので、Tamaru先生の Rikigaku を読み直して、いよいよ自分がローマ字の実用の時代にはいったと思いました。講義ノオトがローマ字で書いてあるのを学生が見つめて、英語で書いてあるのかと思っていましたと、言いました。それから数年たって、静岡高等学校から来て入学した学生が私がローマ字論者だということを初めから知っていたのにはびっくりしました。当時の学生の間ではそういう情報がよく伝わっていたのでしょう。

自分でローマ字書きの文章を作ってみると、専門用語の処置が何よりの問題だとわかりました。この問題は、少し大きくとらえれば、役所の部局やあらゆる法人の名前を含むものになって、非常に大きな規模のものになります。それは、近世に

なってヨーロッパから取り入れたいろいろな事物に基づくものであり、それらの大部分を先輩は漢字の組み合わせで処置して来た、ということは広く知られています。

ところが現在では、漢字がすたれてカタカナ書きの外来語が幅をきかせています。それも、専門用語の類ばかりではなく、普通の語や語句までその流儀でする例が多くなっているのです。新聞の投書でさえ、しばしば問題として取り上げています。

漢字が勢力を失うようになったのは、1895年からのことだとも言えます。それは日清戦争で清国の敗けが明らかになったのがきっかけであり、日本ばかりでなくほかの国のひとびともそれ以来中国文化を尊重することが少なくなりました。その上に、1945年以来、日本では国語審議会の方針によって漢字の使用にせまいわくがはめられました。しかも科学と技術の発展と共に専門用語を日本語の中に新たに数多く取り込む必要が出ました。それに応ずるために、カタカナ書きに頼るようになったわけでしょう。それは、どの言語の歴史にもあるような外来語の借用の一種ではありますが、日本語の場合には、漢字かなまじり文の中にラテン文字の語を取り入れるという特殊な事情があります。まず、ラテン文字をカタカナに書き直すという操作は蘭学の時代から行なわれていますが、元来じっくりとは行きません。そこで、書き換えはしないことにすれば、縦書きとはお別れということになります。私は、その姿が日本語の将来の形のうちで最も早く確かなものになると考えます。

そこで、印刷物の上でそのような形にすでになっているものを拾い上げて、ある程度の数の例を並べて眺めて、そこに日本語のローマ字による表記の将来の姿をかいま見ようというわけです。

そのような例を集めるのには、主としてふたつ

\* 東京大学名誉教授

の新聞の広告欄を使いました。そのほかに、出どころを言うまでもなく、一般に行なわれているとしてよいと思う例を入れました。

たとえば、NHK, NTT, KDD, JR などのような特殊法人や NISSAY, NISSIN, Nikkei, TBS, NACK 5 などのような一般の企業の名などです。

それらを適当に区分して、例示する方法をとりたいところですが、うまい方法が思いつきません。そこで、集めてある例を ABC 順のままを出して、適当なページ数になるところまで続けてみます。ただし、取り上げた項目の性質による大まかな 10 の項目のもとに類別はしてあります。その類別も、作業を進めながら次第に直して行ったもので、十分に考えて作った方式によったものではありません。項目 p の自動車や z の雑誌の名前は、なるべくひとの目を引くようにと考案されたものでしょうから、一種の流行のようで、うたかたのように現れてもじきに消え去るものが少なくないと思います。

## 2. 現在行なわれているローマ字の表記例

### a. 普通の語や句

- album 特に compact disk の広告についてしばしば用いられる。
- all しばしば見る。
- All ways 開高健による小説の標題。always ではない。角川文庫。
- AM (1) amplitude modulation の略。(2) ante meridium の略。
- antique しばしば見る。antique doll など。
- APR April の略。
- art しばしば見る。
- asa fair (麻フェア) 百貨店の広告で、漢字とラテン文字とを直接につないだ例。
- AT車 英語 automatic の略を AT として、自動車について言う。
- ATM 現金自動預払機。
- bargain (バーゲン) 非常にしばしば。
- bazar (バザール) フランス語から。英語では bazaar。
- best しばしば見る。

- big しばしば見る。
- body しばしば見る。
- book しばしば見る。
- cable television しばしば見る。
- cadendia (カデンディア) 《律動》と訳している。日本音楽教育センターによる。
- car (カー) おもに自動車を意味させて使う。
- card (カード) 名刺, 入場券, 公衆電話通話料金や鉄道乗車料金の支払のための券, ひいては催し物, 番組, 呼び物を意味する。
- cash terminal (キャッシュ・ターミナル) card によって現金を受け取る場所。英語? Nicos による。
- catalog (米語), catalogue (英語) (カタログ, 昔は型録と書いた)。
- CATV cable television の略?
- CD compact disk の略。
- CD-ROM しばしば見る。ROM は read-only memory の略。Oxford の Encyclopedic English Dictionary の見出し語になっている。
- chance しばしば見る。
- coffee 関東ではコーヒー, 関西ではコーヒ。
- compact disk (コンパクト・ディスク)
- computer (コンピュータ)
- concert (コンサート) 演奏会の意味でしばしば見る。
- culture center (カルチャー・センター) 外国語, 日本の古文, 各種の稽古ごとを習う総合的な講習会場。英語ではない?
- c/w coupling with の略。compact discs の new single の広告で見える。(new single とは何?)
- cycle road race (サイクルロードレース) 路上での自転車競争。
- data pal (データパル) 《最新情報用語小辞典》とうたう本の標題。小学館。
- début または debut
- déjà vu (デジャヴュ) 《既視》と訳している。日本音楽教育センターで。

- DNA deoxyribonucleic acid の略。
- elegy 《哀歌》と訳している。日本音楽教育センターで。
- ethnic sound エスニック・サウンドとしている。日本音楽教育センターで。
- event ときどき見る。催しごとを意味させて。朝日新聞社広告局による。
- eventhall Seibu による。光が丘の。
- exciting (エキサイティング)
- exhibition (画家の個展)
- exterior (エクステリア) 新日軽株式会社。
- family (ファミリー)
- fashion 非常に多く見る。
- FAX facsimile transmission の略。
- feel しばしば見る。
- festival (フェスティバル)
- fin (ファン) 《終末》と訳している。フランス語、日本音楽教育センターで。
- fleur (フルール) 花の意味で(フランス語)。

b. 地名

- America, -Akasaka, -Akihabara, -Asakusa, -Asia, -Australia, -Beppu, -Canada, -Europe, -Fiji, -Florida

c. 法人、機関、団体や個人の名前

- AFLAC アメリカンファミリー保険会社。
- AJINOMOTO 調味料、食品などの製造販売会社。
- Alico アリコジャパン(生命保険会社?)。
- All Nippon Airways 全日空。
- American Express (international Inc.)
- Amy Yamada 小説家山田詠美。
- ANA All Nippon Airways の略。
- Antlers(アントラーズ) soccer team。
- APEC アジア太平洋経済協力閣僚会議。
- ASA 朝日新聞販売所の別名。
- Asahi (1)アサヒビールの商標、(2)朝日新聞などの商標。
- Asahi Abroad Salon 朝日新聞社による海外旅行の紹介の催しごと。Salon は英語

ではなく、フランス語だが、ここでは日本語化したもののローマ字書きか?

- ASEAN Association of South East Asian Nations の略。
  - ASTRAEA Hotel (アストリアホテル) 東武興業による日光中禅寺湖のほとりにあるホテル。ギリシア神話からのややこしい綴りの名前がなぜ持ち出されるのか?
  - Autorama (オートラマ) 自動車(Ford)の販売店網の名前。
  - Bank of Tokyo 東京の正式の表記は Tokyo であることに注意されたい。
  - BA British Airways の略。
  - BANYU (バニューではない) 万有製菓。
  - bay fm FM radio の企業。横浜。ただし横浜湾という名は正式にはない。
  - BBC (British Broadcasting Corporation の略)
  - Berlitz (ベルリッツ) The Berlitz School Languages (Japan) Inc の略。(学校会社、と訳せるところに注目)。
  - Boehringer Ingelheim (ベーリンガーインゲルハイム) 製薬会社。
  - Bund Hotel (バンドホテル) Bund は Hindu 語から。
  - CASIO (カシオ)。計算機製作会社。特徴のあるローマ字綴りに注目。
  - Concert Gebouw (コンサート・ヘボウ) gebouw は建物を意味する普通名詞で、ドイツ語の Gebäude が最も近い語か?
  - Chacott (チャコット) ダンスやスポーツに関する店。
  - CHAGALL (シャガール) 美術に関する店。
  - CHANEL (シャネル)
- d. 事業計画の名前、呼び掛け言葉
- Be yourself! バイパススクール事務局。
  - BIG OAK, Only you, only me 住友林業。
  - BOOK PAGE 紀伊国屋書店の年鑑名。
  - BOOK TIMES 朝日新聞による各月の紹介。

- Catch the Wave '93 三和。
- Life together Nissan no yobikake. ← Brillante.
- Newdeal (ニューディール)
- NIE《教育に新聞を》(newspaper in education?)
- UNAE 国際連合公用英語検定試験。たとえば、《Discover your English ability with UNAE》という呼び掛け。講談社による。

e. 制度、約束などの名前

- NAT North Atlantic Treaty 北大西洋条約。
- ODA 開発途上国援助。
- PKO Peace Keeping Operation 平和維持活動。
- venture enterprise ベンチャー企業。
- veteran ベテラン (ただし、退役軍人の意味では用いられていない)。
- volunteer ボランティア (ただし、義勇兵や志願兵—つまり日本では自衛官—の意味では用いられていない)。

f. 航空機、船、鉄道車両、列車などの呼び名

- Airbus ヨーロッパ (フランス、英国、スペインなどの各国) 共同製作の中型・大型の旅客機の総称。
- ASAHI 上越新幹線列車。
- ASAMA 長野行新幹線列車。
- ASUKA 日本郵船の観光用旅客船。
- B29 米空軍の爆撃機。太平洋戦争で日本の都市の攻撃に使われた。
- B747 米国のBoeing社製の超大型民用機 (旅客用と貨物用とがある)。
- C57 蒸気機関車の名。貴婦人の愛称がある。
- C62 蒸気機関車の名。特急用として最大。
- D52 蒸気機関車の名。貨物用として最大。
- HIKARI 東京博多間新幹線列車。
- NOZOMI 同上。
- TGV フランスの高速列車 (Train à

grande vitesse)。

m. 症病の名前

- AIDS (エイズ)

p. 自動車、電気機器、薬品、食品などの商品名

- Accord (アコード) Honda。
  - AFS Yamahaが開発した《静空間》。
  - Apple (アップル) アップルコンピュータK.K.。
  - artline (アートライン) Shachihataによる。
  - Audi ドイツのAudi NSU Auto Unionという株式会社が生産する自動車の名。NSUはNeckarsulm。主要工場所在地から来ているのか?
  - Avenir (アベニール) Nissanによる。
  - Bluebird (ブルーバード) Nissanによる。
  - BMW ドイツのBayerische Motorenwerkeが生産する自動車の名。
  - Bunshun Nonfiction Video
  - Bunshun Travel Video Vists (Vistsとは何か?)。
  - Cadillac (キャデラック) 米国のG.M.が生産する自動車。
  - CALDINA (カルディナ) Toyota。とげのある低木の名。
  - CALPIS (カルピス) 飲料品。
  - Campbell's (キャンベル) 米国の食品。
  - CAMRY (カムリ) Toyota。《冠》から。
  - Canon (キャノン) 写真器など。
  - Coca-Cola 米国の飲料。
  - Cartier (カルティエ) 1847年以來の宝飾商とうたう。
- r. 公的に定められている語
- A 電流のSI単位の名。Ampèreの記号。
  - H 周波数あるいは振動数のSI単位の名。Hertzの記号。
  - J エネルギー、仕事、熱量、電力量のSI

単位の名。Joule の記号。

- kg 質量のSI単位の名。kilogram の記号。
- m 長さのSI単位の名。metre の記号。
- N 力のSI単位の名。Newton の記号。
- Pa 圧力や応力のSI単位の名。Pascal の記号。
- V 電位, 電位差または電圧, 超電力のSI単位。volt の記号。この場合, 起原はイタリアの物理学者 Alessandro Volta (1745-1827) にあるが, 単位名にするときに語尾の a が省かれた。
- W 仕事率, 工率, 電力のSI単位。Watt の記号。

#### x. 新造語? (他の項のもの以外)

- acom (アコム) 貸金業。
- Amenicare Service シロアリ, ゴキブリ, カビに対する対策の業務。
- Aqualine (アクアライン) 木更津と川崎を結ぶ自動車道路。
- Centrage (セントレージ)

#### z. 雑誌の名前

- Active Japan (アクティブジャパン) 体に不自由のあるひとのためのsportsに関する情報を扱う。
- ADLIB (英語ならば ad lib だが)。
- ADOLE (アドレ) 日経新聞社による。英語 adolescence からか?
- AERA (アエラ) 朝日新聞社による。何の略記か?
- an・an (読み方は添えてない) 婦人向け。マガジンハウス社による。
- apo (アポ) SS コミュニケーションズによる。ビールとおつまみの店を紹介するもの。
- ar (アール) 主婦と生活社による。
- Article(アーティクル)
- Art news (アートニュース) 同朋社出版(京都と神田)による。
- ARTPOLITAN (アートポリタン) 《地球規模の雑誌》と号する。同名の出版社に

よる。

- Asahi JOB Weekly 朝日新聞による就職案内(各週)の欄の名前。同紙は英語が好きらしい。
- Asahicamera (アサヒカメラ) 朝日新聞社による伝統的なもの。
- ASCII (アスキー) Personal computer のための雑誌。株式会社アスキーによる。
- ASUKA 角川書店による ASUKA ノベルスという小説雑誌(2か月刊), および月刊あすかという雑誌の増刊号《小説 ASUKA》。他に, クルーズ船の名も。
- Auto Camper (オートキャンパー) 八重洲出版による。
- Autosport または AUTO SPORT 三栄書房による。
- av. (㈱交通タイムスによる。active vehicle の略)。
- Balloon (バルーン) 妊娠・出産のための雑誌。主婦の友社による。
- Band Journal 音楽之友社による。
- Band People(バンドピープル) 八重洲出版による。
- Bart (バート) 集英社による。ドイツの《Stern》と特約のもとで。
- bea's up (ビーズアップ) 《きれいにわがままなニュース実用誌》としているが, 何のことか?
- Beginner's (ビギナーズ) 月刊誌 oh/pc ビギナーズというものもある。
- Beyond (ビヨンド) 世界文化社による《Men's Ex》という雑誌の増刊号の名。
- BIG tomorrow (ビッグ・トゥモロウ) 青春出版社による。
- B-ing(ビーイング) リクルート社による。
- Birder (バーダー) 文一総合出版による。birder は米語。
- Bises(ビズ) 婦人生活社による。bises はフランス語の卑語か?
- Boon(ブーン) 祥伝社による。米語か?
- Brillante (ブリランテ) 朝日新聞社による。年2回刊? brillante はイタリア語

- か？
- BRUTUS マガジンハウスによる。
  - BT 《美術手帖》の別名？美術出版社による。
  - BULLDOG (ブルドッグ) (株)ワールト・フォトプレスによる。
  - CADET (カデット) 講談社による。
  - CALMOT (カルモ) 誠文堂新光社による。
  - Can Cam (キャンキャン) 小学館による。
  - CAPA (キャパ) 学研による。
  - CARBOY 八重洲出版による。
  - Capitão (またはBunshun Capitão) 文芸春秋社による。なぜ、ポルトガル語？ãはポルトガル語に特有。
  - Carrère (キャリエール) 朝日新聞の女性向けの職場案内の定期欄の名前。キャリアの意の仏語と説明が加えてある。そうすると、《キャリア》は広く知られていることになる。しかし、この場合英語はcareerであって、それに対してキャリアとするのは、古くから外務省の中にあるが、これは適切でない。
  - cats (キャッツ) 猫のためのもの。ペットライフ社による。
  - Caz (キャズ) 扶桑社による。
  - chère (シェール) PHPの増刊？
  - chil chin bito (チルチンびと) 季刊雑誌の名前。《chil chin》は、米国Arizonaの大きな部族Navahoの言語で飲食用の植物を意味する。《bi》は接続辞、《to》は水を意味する、と言う。
  - CHINESE DRAGON (チャイニーズドラゴン/中国巨龍) 中国経済情報を扱う。竹書房による。
  - Choice ゴルフ好きのための雑誌。
  - Chou Chou (シュシュ) 女性向け。角川による。
  - CLASSY (クラッシィ) 光文社による。
  - Click (日経クリック) 個人用情報処理器(personal computer)のためのもの。
  - CLIQUE (クリーク) マガジンハウスによる。
  - Comickers (コミッカーズ) マンガを作るためのもの。美術出版社。
  - Como (コモ) 主婦の友社による。
  - Computer Today サイエンス社による。
  - Confort (コンフォルト) 建築資料研究社出版部による。Confortは、Comfortではなく、フランス語だが、その場合、終のtは発音しないでrを発音する。
  - COSMOPOLITAN (コスモポリタン) 集英社による。
  - CQ ham radio CQ 出版社による。CQは、call to quartersの略だが、それは帰営ラッパを意味する場合もある。
  - CREA (クレア) 文芸春秋社による。
  - Creative Life Store. Tokyu Handsのうたい文句。
  - Croissant (クロワッサン) マガジンハウスによる。Croissantはフランス語で、《次第に大きくなる》という形容に用いられるが、《三日月》を意味し、さらに三日月形の、バターを多く含んだ、やわらかいパンを意味する。ここでは何をさすのか？
  - Cycle sports 八重洲出版による。
  - dacapo (ダカーポ) マガジンハウスによる。dacapoはイタリア語da capoを縮めたものか？
  - Dance magazine (ダンスマガジン) 新書館による。
  - dancyu (ダンチュー) cyuをチューと読ませるのは乱暴ではないか？食事の調理に関係があるらしいから、cyuは厨を表わすものか？プレジデント社による。
  - DATA PAL (データパル) 《情報・用語小辞典》とうたう。雑誌の特別号か。小学館による。
  - DB Pro. for Windows 朝日新聞社の《Asahi パソコン》から。DB Pro.はData-Base Program(me)の略？
  - DENIM (デニム) 小学館による。
  - DIME (ダイム) 小学館による。



- DOMANI (ドマーニ) 小学館による。
- DOS/V magazine または DOS/V Power Report ソフトバンク/出版事業部による。
- Dragons 中日新聞社による。
- DREAM (どりーむ) interior design のためのもの。どりーむ編集局による。
- driver 八重洲出版による。
- EDUCAST (エデュキャスト) 旺文社による。
- ELLE DECO, interior design のためのもの。アシエット フィリパッキ・ジャパンによる。
- ELLE JAPON (エル・ジャポン) タイム アシエット ジャパンによる。
- el medio (エル メディオ) 時事通信社による。なぜスペイン語を使うのか?
- English network (イングリッシュ・ネットワーク) (株)アルクによる。
- entrepreneur Japan (アントレ), リクルート社による。entrepreneur を起業家と訳す。
- ESSE (エッセ) フジテレビジョン/扶桑社による。
- 歴史 Eye (アイ) 日本文芸社による。
- EYE-COM (アイコン) (株)アスキーによる。

### 3. おわりに

この文は、普通の文とは大ぶん違って、初めから終りまでを直線的に書いたものではなく、書きながら構成を次第に直したり、材料を補ったりしたので、指定された長さにはできませんでした。

日本語はローマ字で書き表わされるのが最もふさわしいとは、はっきりとは言われたことはないでしょうが、その日本語が漢字だけではなくてローマ字で書き表わされるようになっていたとすれば、いろいろなひとびとによって、いろいろなくふうが加えられて、日本語も変化していたでしょう。不勉強のためにそのことについて何も知りません。しかし、漢字だけを使っていたところに、それが未だ僅かの年月を経たばかりなのに、漢語という

形で日本語の中にたくさんの言葉が取り込まれたので、日本語の発達強く押さえ込まれたに違いないと思います。そのようにして、伸びかけようとしていた発達のあとが、現在の日本語の中に何かの形を残している、というようなことを研究しておけばよかった、などと思います。

現存の日本語の中には、上に申したようなわけで新しい事物などのための専門用語のために新しい発展のうごめきがあるに違いないし、そこでラテン文字をそのまま取入れることも多くなっているに違いないと考えて、上にその一部の例を並べてお目にかけました。これらのほかに、カタカナ書きの英語などが、これの10倍以上もあるでしょう。しかし、それらが将来ローマ字化されるとは考えません。つまり、ローマ字による日本語の表記とは直接には結びつかない、と見ます。

そこで、《現在行なわれているローマ字》ですが、集めて見るとその数が意外に多いこと、それらができて来た事情が雑多らしいことに気を取られます。それらのものが英語にある例が多いのはわかりますが、由緒不明のものなどふざけたものもあるのが気になります。それでも、集められた例の数が多く、種類も多いから、よく眺めているうちに、それらの中から将来のローマ字書きの日本語の姿をかいま見ることができれば、と思います。その際、日本語の歴史が一度は平安時代の初期にもどって、そこから出直すということを前提にしなければならぬでしょう。途方もないことを言うようですが、平安時代から現在までよりも、現在からさきの方が、日本人が日本語のためにすばらしい仕事をするができる、と言えるのではないのでしょうか。手近なところで考えても、情報処理装置の発達によって、言語の発展の実験的に研究することもできるでしょう。

(1997年7月31日)

～特集：ローマ字問題を考える～

## ローマ字問題について

竹森 利清・ TAKEMORI Tosikiyo

### 1. まえがき

今回「ローマ字問題を考える」というテーマで意見を求められ、今まで何とはなくローマ字を使い、あるいはWPでローマ字入力をして、カタカナ、ひらがな、漢字に変換していたことへの反省を求められた気がする。

日本語の中にローマ字が採り入れられてから久しいけれども、後述するように、ローマ字を習い覚えてから、ローマ字を使って文章を書いたりする機会はなく、サインに使うしかなかっただけに、ローマ字問題の経緯・動きに、どう対処したらよいという提案できるほど問題提起できるかどうか判らないが、経験したことから、技術専門用語を、WPで入力する点で述べてみたいと思う。

### 2. ローマ字に接した経過

私がローマ字を習ったのは、1931～32年頃、中学生の頃である。したがって、ヘボン式ローマ字を習い覚えた。そして特にローマ字で文章を書いたり、ローマ字の図書を読む機会は大学までなかった。せいぜい購入した図書に、自分の名前をローマ字で書いたのに過ぎなかった。

大学に入って、故岡本哲史教授から、航空の大先輩であった田中館愛橋先生が、ローマ字の使用について国会に働きかけられたことを伺った。それに触発されたわけではないが、同じくローマ字論者であった田丸卓郎先生の“Rikigaku”を買って勉強を始めた。ところが読むのに苦勞し読み通すことができなかった。その原因は、漢字ひらがな、またはカタカナ混じりの文章と違い、一字一字拾い読みして頭の中で組み立てていかなければならない面倒さで、一気に読み通せなかったこと

である。一字一字拾い読みするのは英文でも同じであるが、英文では英字の一かたまりを単語として頭に畳み込まれたため、最初の2～3字で先を読み取れる。それに較べ、ローマ字文はそのように訓練されていないから、単語の終りまで読んで初めて何のことかが、理解できたからであろう。そして特に先生の独特な用語“yoyo na”が記憶に残っている。これは漢字で書けば「様々な」、大和言葉ではあって、どこかしらに必ず使われていた。

ローマ字で文章を書くときには、単語を分かち書きが必要で、これは戦後に接したカナモジカイの主張と同じである。日本語の文章では、名詞、動詞、助詞、あるいは前置詞等の間に区切りがないので、続けてローマ字・カタカナ・ひらがなだけで書かれると読みにくい。これはコンピュータで印字された文章を読むのに一苦勞したことに通ずる。したがって、この分かち書きのルールも決めておかないと、他人の書いた文章が読めなくなる。現在はローマ字だけで書いた図書を見掛けないし、どこでそのルールが決められているのか、残念ながら知らないで、カナモジカイのルールで論文表題をローマ字で書き、英訳をつけている。

戦後、息子が小学校に上った時、小学校でローマ字を教えることを知り、勉強を見てやる立場から、初めて訓令式ローマ字に接した。ヘボン式に較べて、母音と子音の組合せが単純で覚え易いものであった。我々の時代のようにヘボン式で習った者には、chi, shiがti, siとなり、発音にこだわると妙な日本語になるようにも思った。しかし発音は、国によっても異ってくるし、同じ英語圏でも違ってくるのだから、先ず覚え易いことは使い易いことだと納得した。

後年、技術翻訳で論文を扱ったり、自分用の文

\* 竹森技術事務所

献データベースを作るに到って、著者名のローマ字化、また前述の表題のローマ字化で、訓令式かへボン式かに迷ったが、主として米国向けと割り切ってへボン式を採用し、現在に到っている。

### 3. 用語集について

技術翻訳あるいは技術用語集を作る場合には、和英・英和辞書をはじめとして、いろいろの分野の専門用語集、学術用語集を使うことになる。英文の和訳の時にはローマ字は関係ないが、和文の英訳の場合は、和英辞書と学術用語集のローマ字で、用語を見つけなければならない。各分野ごとの専門用語集では、カタカナの語順で用語が並べられているので、ローマ字には関係しない。

さて和英辞書は一般に、へボン式と特有の方式との組合せがとられている。特有というのは、「新聞」とか「電報」などのように、へボン式では“mb”，“mp”と書くところを“nb”，“np”で編集されていることである。一方、学術用語集は言うまでもなく訓令式ローマ字を使っている。したがって、この両者を参考にするときは、往々にして、語順が違っているのでまごつく。その意味では統一した方式のローマ字を使って欲しいと思う。

8ビットマシン時代に個人用の用語集を作ったことがあったが、その時は訓令式ローマ字を用いた。ある企業から用語集をまとめる依頼があった。語単位でローマ字から漢字に変換できるソフトウェアがあったので、ローマ字入力は訓令式によった。しかし語順は、ローマ字(訓令式)の語順に従い、これをカタカナに変換してまとめてしまったので、使いづらくなってしまった。紙面の余裕があればローマ字・カナ・漢字混りのひらがな・英語とするか、カナなしにすればよかったと思う。これは、まだ一般には学術用語集を使いこなしていないだろうと、ローマ字をカタカナに入れ替えた失敗だった。

最近では漢字+ひらがな-英語・出典頁の簡単なまとめ方で納めているが、自分用の用語データベースには、カタカナで読みを入れ、アイウエオ順に並べ替えている。したがって最近では、用語集の作成にはローマ字を使っていない。

### 4. WP入力をする場合のローマ字

パーソナルコンピュータ(PC)のWPソフト(例えば「一太郎」)を使って、用語、文章を作るときはローマ字入力をして変換している。英語と共存して使うためには、カタカナ入力では不便であることから、そういう方法を採用したのである。また英文を扱う関係で、英文字キーに馴れており、入力スピードが速いことにもよる。

ローマ字入力に当って、指の使い易い英字、ストローク数の少いローマ字を使うように心掛け、そのように自然に指が動いてしまうので、つづり方は訓令式とへボン式の混用になる。例えば、「チ」、「シ」等は“ti”，“si”を使うが、「ジ」は“ji”と近いキーを選び、「ジョ」は“jo”とストローク数を節約する。これはWPソフトの設計の仕方にもよるものと思うが、へボン式・訓令式に拘わらず、能率的に入力できる点で、拘束力があまりない方がよいと考える。

ローマ字で表わさなければならない。例えば、前述の論文表題のローマ字書き、著者名(日本人)を入力するとき、面倒なのは、長音記号“^”である。現在に至るまで使っていない。企業によっては“OH”のように“H”で表現している所もあるが、公認された書き方なのかどうかかわからないので採用していない。WPソフト(例えば「一太郎」)の取扱説明書によれば、特別のコード(指使い)で表現できるようである。正確を期するときには利用してみたいと思っている。

### 5. おわりに

ローマ字に接した経緯、利用した経験、特に辞書、用語集を使った経験、WPでローマ字を使った経験から実状と述べたが、さてどの方式に統一したらよいかということに対しては、こうしたらよいというしっかりした意見は出せない。国際的に認められるためには、外国人に受け入れられ、理解できるという確証なり実績がものを言うのではないかと考える。そのためにも、我々にもどのように外国人が評価しているのか知りたいと思う。

～特集：ローマ字問題を考える～

「特集：ローマ字問題を考える」への後書き

太田 泰弘\* OTA Yasuhiro

後書きに入る前に、関連する用語の定義 (JIS X 0705-1989)を列記しておこう。

翻字<sup>1)</sup> (transliteration) : 完全なアルファベット体系で書いてあるキャラクタを別の変換用アルファベットのキャラクタで表現し直すこと

翻音<sup>2)</sup> (transcription) : 元の記述方式がどのようなものであれ、ある言語のキャラクタを別の言語の文字または記号の音声体系で表現し直すこと  
ローマ字化 (romanisation) : ラテン文字を用いないアルファベット体系で書かれたものをラテン文字に変換すること。ローマ字化するためには、変換された体系の性格によって、翻字もしくは翻音を利用するか、またはこの二つの方式を併用して利用することができる。

<sup>1)</sup> 言語学者は「転字」または「字訳」という日本語を使うこともあるらしい。

<sup>2)</sup> 言語学者は「翻音」という日本語は不適切であるとし、「転写」または「音訳」の採用を望んでいる。

ターミノロジーやドキュメンテーションに関わる用語集には「ローマ字」という用語は見当たらない。代わる用語は「ラテン文字」である。“研究社和英大辞典”では「ローマ字」に“romaji”をあてているので、対応する英語はないのかもしれない。日本文字をラテン文字へ変換する仕方は、「翻字」と「翻音」との併用であるから、そのことを「ローマ字化」という用語で表現することになったのだろうか。

専門用語に関わるものにとって、「ローマ字化」は避けて通れない課題である。しかし、その議論

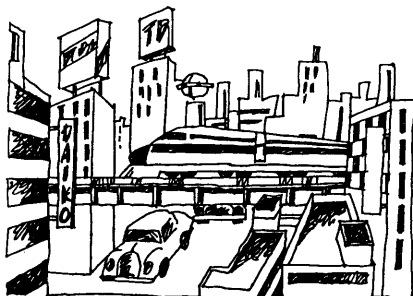
をする以前に、ワープロやパソコンに向かっている人の95%がローマ字入力をしているというデータに驚く(柴田論文)。彼らにとっては訓令式だろうとヘボン式だろうとどちらも意識することはない。どちらで入力しても日本字表記への変換ができるというパソコンメーカーの説明を受ければ、方式はどうでもよいことである(竹森論文)。助詞の「は」や「へ」の入力はどちらにも属しない方式によるのだが(柴田論文)、ローマ字表記ではないから問題にすることではなさそうだ。表記ということになれば、どちらかの方式に決めねばならない。ローマ字表記の歴史(青戸論文)をひもとけば、軍配は訓令式にあげざるをえない(ヤマサキ論文)。しかし、現実にはヘボン式使用が圧倒的である(柴田論文)。

新聞におけるローマ字使用の現状(井口論文)をみると、日本人の母語が英語になってしまうのではないかとの不安におちいる。もっとも、雑誌の標題が外国語らしきものであっても内容は日本語であるから、これは危惧にすぎないのだが、ローマ字書きの日本語の将来を思うと、いささか心配である。

そのようなことよりも、ローマ字表記に関する日本政府の姿勢に不満を表明しておきたい。国際規格にヘボン式が採用されかけたとき、欧州諸国の助けをかりて訓令式の採用をせまり、ついに訓令式を国際規格として承認させるに至ったといういきさつがある(ISO 3602:1989の付属資料による)。このことを知れば、訓令式の国内普及に努力することは国際的信義というものである。民間はいざしらず、政府機関が訓令式を採用しないのは、公務員の行動を規制する訓令への違反といえるのではないか。内閣訓令にはヘボン式も収載されているが、これは連合軍の占領下における過渡

\* 文教大学国際学部教授  
「専門用語研究」編集委員

期の措置であって、本筋は訓令式なのである。どちらでもよいではないかというのは、正書法の重要性を認識しない日本人の悪癖であり、このままでは日本語を学ぼうとする外国人を嘆かせ、国際語として日本語を使用するための大きな障害となるだけである。



---



---

## 編集後記

---



---

◆この特集により、ローマ字化について二つのことを再考しなければと思った。一つ目は、複数のローマ字化規則の長所短所を再考すること。二つ目は、規則を一つに絞る必要性と、一つに絞るための方法を再考すること。

長所短所については、幅広い観点から見直し、今にあった性格付けを行う必要がある。

また、複数ローマ字化規則でさまざまな現象が発生しているが、それがどの程度問題なのか、1規則統一の必然性も見つめなおす。これについては、国の委員会で今後10年間かけ納得するまで議論するもよし、国民投票するもよし。

さらに1規則をどのように守らせるかも考える。たとえば、国や地方自治体の書類を5年間かけて統一し、違う規則のローマ字は受け付けないとか。

日常の私的世界は、どんなローマ字を使おうと自由だ。変種、亜種のローマ字が生まれるかもしれない。Zyappuのような間隔の雑誌がもっと出てくるかもしれない。  
(四ノ宮)

### ◆いわゆる日本人論からのローマ字

#### 1. 短縮化の功罪

ローマ字問題を考えるにあたり、遠い昔、漢字が入ってきた時代の頃の反応や変化を考慮することも有効であると思っていたら、今号で井口昌平氏が明確に指摘されている。

平安時代と現代では、国際的な付き合いの量は桁違いであるけれども、一寸立ち止まって考えてみた方が良いと思うのは、日本中が効率を叫んだ時期があって、やや将来を考えずに、ひたすら効率のみを追ったことが言葉にも現れている気がする。漢字においては、他の物質に溶けるのと、自らが温度上昇して溶けるのは、別な物質現象なのだが、これを「溶」の1字にまとめたり、Tōkyōの長音も除いてしまったりで、結局野球の王選手がOHと書いたのも苦しまぎれの感じがする。それでなんとなく一部には定着し、KATOH などと書く。そして一方では、WI, YEなどを実在しながらも、表記を止めてしまった。「原音に忠実な」ももう

一度考えてみる必要を感じる。

#### 2. 討議をしない問題

全体主義国家で、討議もせず総てが国家命令の形で決定される害は大きいけれど、日本では声の大きな者の発言が通ってしまう。意見の討論無き決定を、「仕方ない」と受け身で受け入れるやり方が、わが国を悪化させたとの説がある。さらに、日本が同質の人間の集まりで、自然に言わなくても理解できるとの、変な甘えが存在する。「わかるはず」という暗黙の前提があつての行動は、旧満州国、中国、旧ビルマでの軍に明確に見られ、中央の指令はまったく現地に届かず、逆に無視された。それで大部分、多くの人々が召集された兵隊どもを含めて、被害にあっている。

将来を検討するでもなく、何かをやりだしたボスが自分だけの正当性を主張し、面子を重んじて「このくらいなら許されるであらう」という形の甘えが、勝手な行動を生むという解釈で、将来を考えない、20代無職の連中の一部の荒れ狂った現象が社会に起こり、言葉の上にも及んでいる。

#### 3. 規格は守るためにあるはずだが

柴田会長の談話の、家庭用VTRのベーターとVHSの争い。コンピュータの分野では、あれほど特徴を示していたアップル社の行き詰まりの例がある。

したがって、ワードプロセッサ、文字処理における操作のバラツキの問題が、いずれは統一の方向に向かうのか否か、決着がつく日がくるのがわからない。

ここで、視点を変えれば、問題は個々の機器ではなくて、システムとして考えて、情報のやりとりの点に注目すべきだとの考え方がある。たとえば、世界の地上波のテレビジョンは、NTSC PAL SECAMと、日米、独、仏露などに大別され、それらの番組を別な方式に変換するのは昔はものすごく大変なことであった。方式変換機器が何千万円もしたり、時間も大変かかったのであった。それが、衛星中継などの考え方から、方式の差の問題は縮まった。デジタル化とメモリーの技術が、相互の変換を容易にしたわけで、デジタル放送も、

各地域別でないに越したことはないけれども、まったく別な孤立したものではなくなった。これも必要から生まれたものではあるけれども、将来を前提にしなければ、各国間の調整ははかれない。

ローマ字の問題にもどって、NIGHT をNITEと書けば、同じ発音となるとか、COLOURとCOLOR とは同じ言葉で英米で表記が違うだけといって、ある文の中で、THEATRE と英国流に書き始めて、途中でCOLOR とアメリカ英語の表記を使ってしまっていたらどうなるか、現在訓令式・ヘボン式を混在させて使用している例があるのか。

#### 4. これからは

言葉は独り歩きするというけれど、テレビ、雑誌、新聞の影響は大きい。意味を考えての短縮ではなく、しかも困るのは、日本語に間違えられかねない「オレカ」「俺か」や4文字カナが便利とはいえ、コンビニなどの不明和製語は、やはり止める方向を採らないと、今後、いわゆる日本人論的「仕方ない」がなおさらまかり通るはめになるに違いない。NIGHTER と書けば、夜働く人、夜の強い人といったイメージしか湧かない。RADIO をラジオというのは発音の問題で、これも、RとL、ヴァやディなどを有効に使いこなせば表記できていたと思われる。音が少ない方が簡単な表記で済む。長音を後尾においては切る方が効率的だと済ましてきたが、語中の長音は生きてスピードと書けば「鋼が勝った」のような感じとなり、「スチルカット」では「スチルを買った」にも聞こえる。本当に今までの経過をもう一度基本に戻って、国語という大きな視点から、ローマ字もその重要な一つとして考えないと、ヴァイオリン、デジタル、コンピューターなど仮名表記とも関係する以上、改めて大きな問題として取り組んで行きたい。(中山)

◆この特集号は、ローマ字書きについて「おおまかな理解」しか持っていなかった私に、歴史的にまた論理的に正確な理解を与えてくださった。ただ諸稿を繰り返し拝読しても、「解けぬ」実務的な問題が頭に残っている。本誌4号(22ページ)に提起し、折りにふれて考えているが、得心できていない。編集委員の立場上、すこし付記させていただくこととした。それは、外国語由来の学術用語をカナ書きするルールに関することである。

学術用語集で表記法の支柱の一つがローマ字書きで、そのルールは昭和49年1月制定の「ローマ字による学術用語の書き表し方」である。その全文が本号青戸氏の稿に掲載されている。これが制定されるには化学用語のローマ字書きが端緒となったと青戸氏が書かれている。それは学術用語集化学編に載っている「日本語による化合物命名の原則」のことであろう。以下前者を「書き表し方」、後者を「命名の原則」と略記していく。

「書き表し方」は、漢字やカナ字で書かれた学術用語をローマ字書きするルール集である。「命名の原則」は逆に、外国語で書かれた化合物名をカナ書きするルールである(そのエッセンスが「化合物名の字訳基準表」であろう)。「書き表し方」と「命名の原則」とは、私の点検した限りでは矛盾はない。

ところで、国語審議会が制定した「外来語の表記」は昭和29年のものから、細部を改正して平成2年のものに代わった。幾つか改正されたその細部が、上記の「書き表し方」ないし「命名の原則」に取り入れられたのか? 多くの方に検討を仰ぎたい。

私の見るところでは、昔の原則10. にあった物が、新しい表記法・留意事項のその2の、Iの5により訂正された。

原音における「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」・・・の音はなるべく「ハ」「ヒ」「ヘ」「ホ」・・・と書く

が昔の原則であり、新しい上記Iの5では、

「ファ」「フィ」「フェ」「フォ」は、外来語ファ、フィ、フェ、フォに対応する仮名である

となって、これらは禁止的表現では無くなった。

物理学や化学において phoや phyに由来する語は少なくない。それらが昭和29年「外来語の表記」に拘束されて、「ホト」「ホスホ」・・・などと表記してきた。平成2年の改正はしかし学術用語カナ書きの世界に対してこれらの呪縛をまだ解いていない。

長い間規制し続けてきたものを変えるには勇気が要ることであろう。「化合物字訳の基準はカナ表記のルールにすぎないことで、これに従わずにホをフォと発音することは構わない」といった趣旨のことを聞いたこともある。しかし、これは詭弁といってよいのではないか？

今のままこの規定を続けて、外来語表記平成2年の改正をとりこまないということは、敢えて率直に言わせてもらえば、大勢の移行に気付かぬ愚かなことではないだろうか。(牧野)

◆97年7月21日の日経新聞の“2020年からの警笛ニホンゴ キトク②漢字に国際化の壁 ネット社会で孤立も”の記事中、全ページローマ字文による雑誌の紹介があり、これは珍しいなと思って、発行日にさっそく購入しました。誌名はセンセーショナルにもジャップ『Zyappu』（光琳出版、A4変型、112p.、880円）。

一方、柴田会長から今回の特集原稿を入手し、読んでいくうちにこの雑誌に触れた章を発見した次第です。この雑誌の編集者が、ローマ字化について、Henshū kōki の前のページで下記のように述べているのでご紹介します。

zyappuでは、この号からローマ字化するにあたって、今までのzyappu式ローマ字を一度見直し、ISO 3602という国際基準を採用することにしました。これからはこの国際基準を基本にし、問題があると思われる点についてそのつど検討し、将来のローマ字がどうあるべきかを実戦でさぐっていくと思っています。ここではISO 3602のドキュメンテーション（原文は英語）を日本のローマ字社の柴田武氏が日本語訳されたものから、誌面のつごう上、序文とローマ字表記だけを掲載し、次号で本文の全文を紹介いたします。

そして、柴田会長訳によるISO 3602の日本語序文と訓令式ローマ字の表が掲載されております。次号冬号は10月25日発売予定です。ご関心ある方は書店へどうぞ。(戸塚)





## 「専門用語研究」投稿規定

1. 「専門用語研究」（以下会誌という）には、下記の内容に関する論文・記事を掲載する。
  - ・ターミノロジーの理論と応用
  - ・専門用語集の作成技術
  - ・その他、専門用語に関するもの
2. 会員は、会誌に自由に投稿することができる。編集委員会からの依頼により執筆することもできる。
3. 原稿の書き方
  - 3.1 原稿用紙  
原稿は、通常のA4サイズ横書き原稿用紙（20字×20字）か、ワードプロセッサを使用する。ワードプロセッサを使用する場合は、A4用紙に1行20字、20行で作成し、印刷する。また、可能であれば、MS-DOSテキスト形式でフロッピーに保存し、印刷物と一緒に送付する。
  - 3.2 原稿の長さ  
全体で図表ほかを含めて、原稿用紙16枚から32枚とする。原稿用紙4枚で刷り上がり1ページとなる。執筆依頼時に別途指定ある場合はそれに従う。
  - 3.3 原稿の仕様  
原稿には、以下の内容を記入する。
    - ・和文と英文の、表題、著者名、所属
    - ・和文の、抄録(250字前後)とキーワード(5から10語)  
(可能ならば、英文の抄録(150語前後)とキーワード(5から10語)も)
    - ・本文(ページをつける)
    - ・図表など(番号と表題をつけ、朱筆で文中に挿入位置を指定する)
    - ・引用文献(本文中に肩付き数字<sup>1)2)</sup>・・・を記入する)
    - ・参考文献、参考図書(本文を読む上で参考になるものがあれば)
4. 原稿の受理、査読  
投稿原稿は、当研究会事務局が受け付けた日を受付日とし、会誌編集委員会で査読を行なう。査読結果をもとに、会誌編集委員会で掲載の可否を決定する。委員会で内容・表現などについて修正が必要と認めた場合、執筆者に修正依頼する。
5. 校正依頼  
執筆者に初校を依頼する。この際、大幅な修正・加筆は行なわないこと。なお、論旨に差し支えない範囲で、編集委員会が内容の変更を求めることがある。
6. 掲載原稿の扱い  
会誌に掲載された原稿、フロッピーは返却しない。
7. 謝礼  
執筆者には、掲載された会誌10冊を無料贈呈する。これ以上および抜刷を希望する場合は、有料となる。校正時に申し込むこと。
8. 著作権  
本誌に掲載された論文、記事の著作権は、当研究会に帰属する。
9. 原稿提出先  
専門用語研究会会誌編集委員会

**編集委員会委員**

太田 泰弘 文教大学  
四ノ宮明夫 大正製薬  
戸塚 隆哉 KMKデジテックス(委員長)  
中山 亮一 リョウ・プロダクション  
牧野 正久 東京理科大学  
山下 泰弘 学術情報センター  
山本 昭 関東短期大学

**専門用語研究 第14号**

(1997年8月31日発行)

発行所 専門用語研究会

〒102 東京都千代田区一番町4-6

一番町中央ビル2F

日本総合技術研究所(JIST)内

Tel. 03-3262-8956

Fax. 03-3262-8960